福岡市埋蔵文化財調査報告書第1061集

吉武遺跡群22

—史跡整備に伴う第17・18・19次調査報告—

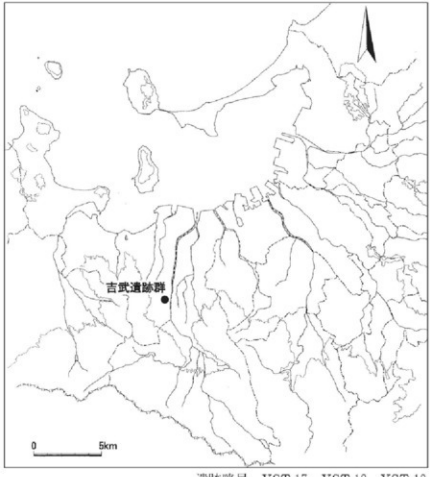
2009

福岡市教育委員会

YOSHI TAKE

吉武遺跡群22

—史跡整備に伴う第17・18・19次調査報告—



遺跡略号 YST-17 YST-18 YST-19
調査番号 0363 0483 0534

2009

福岡市教育委員会

19次調査　1区全景（西から）

19次調査　K140（東から）

19次調査　K153（東から）

19次調査　2区全景（南西から）

19次調査　SC01掘り下げ部分（北東から）

19次調査　3区全景（北西から）

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きるわれわれの重要な努めであります。

福岡市西区に所在する「国指定史跡　吉武高木遺跡」は、昭和56年度～60年度にかけて行われた圃場整備に伴う吉武遺跡群の発掘調査により発見されました。その内容は、多数の副葬品を保有する木棺墓・甕棺墓をはじめとする埋葬遺構群や大型掘立柱建物をはじめとする生活遺構群など、弥生時代のクニの成立から展開を考える上で非常に重要な遺跡として市民の皆様の注目を集めました。その後、後世に伝えていくべき貴重な史跡として、平成５年に約25,000㎡が国指定を受け、ついで平成12年度までに２度の追加指定を受けております。また、史跡指定に先立つ昭和62年には青銅器、装身具をはじめとした多数の副葬品を中心とした645点が国重要文化財（考古資料）として指定を受けております。

現在、教育委員会では、「吉武高木遺跡」について市民の皆様が、貴重な歴史的資産としての理解を深めることができるような、また地域の貴重な活動拠点ともなるような歴史公園として公開・活用をはかるべく、環境整備事業に着手しており、「吉武高木遺跡整備指導委員会」（委員長 樋口隆康）の先生方のご指導を仰ぎながら、「聖なる弥生の丘」を基本テーマとした基本設計の作成に取り組んでおります。

今回報告します吉武遺跡群第17・18・19次調査は、整備事業の推進にあたり、指導委員会より提示された課題を解決するために史跡内で行った確認調査です。調査に当たりましては文化庁・指導委員会の先生方に現地指導をいただきました。

最後になりましたが、吉武高木遺跡の保存から環境整備に当たりましては、長年にわたり地元の皆様には多大なご理解とご協力をいただいております。ここに記して深甚の謝意を表します。

平成21年３月31日
福岡市教育委員会
教育長　　山田　裕嗣

例　言

1．本書は福岡市教育委員会が平成15年度～17年度に行った、国史跡「吉武高木遺跡（よしたけたかぎいせき）」（福岡市西区大字吉武183他）の環境整備事業に伴う、国庫補助金による史跡内確認調査（吉武遺跡群第17～19次調査）の発掘調査報告書である。
2．各調査の担当者は第17次調査（平成15年度）本田浩二郎、第18次調査（平成16年度）宮井善朗、第19次調査（平成17年度）長家伸である。
3．遺構の実測は第17次調査が本田、第18次調査が宮井・山田ヤス子・宮原邦江、第19次調査が長家・福岡弘道が行った。
4．遺物の実測は本田、長家、板倉有大が行った。
5．製図は宮井、本田、長家が行った。
6．写真は各調査の担当者が撮影した。
7．本書で用いる方位は磁北（座標北から6°西偏し、真北から6°18′西偏する）と座標北を併用する。なお座標は特に断らない限り日本測地系を使用している。
8．本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
9．本書の執筆は第1・4章を長家、第2章を本田、第3章を宮井が行い、編集は各担当者の協力を得て、長家が行った。

第17次調査（平成15年度）

遺跡調査番号	0363	遺跡略号	YST-17
所在地	西区大字吉武183他	分布地図番号	93-0405
開発面積		調査面積	753㎡
調査期間	平成16年1月19日～平成16年3月18日	調査原因	史跡整備

第18次調査（平成16年度）

遺跡調査番号	0483	遺跡略号	YST-18
所在地	西区大字吉武183他	分布地図番号	93-0405
開発面積		調査面積	720㎡
調査期間	平成17年1月26日～平成17年3月9日	調査原因	史跡整備

第19次調査（平成17年度）

遺跡調査番号	0534	遺跡略号	YST-19
所在地	西区大字吉武183他	分布地図番号	93-0405
開発面積		調査面積	970㎡
調査期間	平成17年7月19日～平成17年9月22日	調査原因	史跡整備

目次

1章　はじめに……1
　1．遺跡の立地と環境……1
　2．これまでの調査概要……3
　3．確認調査に至る経緯と各調査の目的……8

2章　第17次調査報告……11
　1．調査の経緯……11
　2．調査体制……11
　3．調査の目的と方法……12
　4．調査の概要……13
　　(1) 1トレンチ……13
　　(2) 2トレンチ……16
　　(3) 3トレンチ……18
　　(4) 4トレンチ……19
　　(5) 5トレンチ……21
　5．小結……22

3章　第18次調査報告……25
　1．調査経緯と組織……25
　2．調査の記録……25
　3．小結……28

4章　第19次調査報告……33
　1．調査の目的及び調査経過……33
　2．調査体制……33
　3．調査内容……34
　　(1) 調査概要……34
　　(2) 1区の調査……35
　　(3) 2・3区の調査……50
　4．小結……57

附編　福岡市、吉武高木遺跡における自然科学分析（株式会社　古環境研究所）……59

挿図目次

第1章

Fig.1　調査地点位置図（1/50,000）…… 2

Fig.2　吉武遺跡群調査地点位置図（1/5,000）…… 5

Fig.3　史跡指定範囲図（1/2,000）…… 7

Fig.4　史跡地内調査地点位置図（1/2,000）…… 9

第2章

Fig.5　第17次調査　トレンチ位置図（1/2,000）……12

Fig.6　1トレンチ出土遺物（1）（1/3）……14

Fig.7　1トレンチ出土遺物（2）（1/3）……15

Fig.8　各トレンチ遺構配置図・土層断面図1（1/200）……折込

Fig.9　2トレンチ出土遺物（1/1・1/3）……17

Fig.10　3・4トレンチ出土遺物（1/1・1/3）……20

Fig.11　各トレンチ遺構配置図・土層断面図2（1/200）……折込

Fig.12　4トレンチ土層断面模式図……21

Fig.13　地形復元図1（1/1,000）……23

Fig.14　地形復元図2（1/2,000）……24

第3章

Fig.15　調査区全体図（1/400）……27

Fig.16　18次調査基本土層図（1/60）……29

第4章

Fig.17　調査地点位置図（1/500）……34

Fig.18　1区遺構配置図（1/250）……36

Fig.19　1区調査区内土層図（1/80）……38

Fig.20　K140及び出土遺物実測図（1/30、1/3、1/8）……40

Fig.21　K153実測図（1/30）……42

Fig.22　K153出土遺物実測図及び写真（1/3、1/8、1/12）……43

Fig.23　SD01及び1層出土遺物実測図（1/100、1/3）……46

Fig.24　SD01　2層出土遺物実測図（1/3、1/4）……47

Fig.25　1－1区出土遺物実測図（1/2、1/3）……48

Fig.26　1－2区出土遺物実測図（1/3）……49

Fig.27　1－3区出土遺物実測図（1/3）……49

Fig.28　2・3区遺構配置図（1/200）……51

Fig.29　SC01実測図（1/80）……52

Fig.30　出土遺物実測図1（1/2、1/3）……54

Fig.31　SC01出土遺物2及びSC02出土遺物実測図（1/2、1/3）……55

Fig.32　3区全体図及び出土遺物実測図（1/100、1/3）……56

Fig.33　埋葬遺構群の区画（1/300）……58

写真目次

巻頭写真１　19次調査　１区全景（西から）
巻頭写真２　19次調査　K140（東から）
巻頭写真３　19次調査　K153（東から）
巻頭写真４　19次調査　２区全景（南西から）
巻頭写真５　19次調査　SC01掘り下げ部分（北東から）
巻頭写真６　19次調査　３区全景（北西から）

第１章
PL.1　６次調査（高木地区）甕棺・木棺墓群（南から）…… 8
PL.2　９次調査（大石地区）「甕棺ロード」（東から：奥は飯盛山）…… 8
PL.3　圃場整備以前航空写真（枠内が指定地）……10
PL.4　現況遠景（写真上部は博多湾）……10
第２章
PL.5　１トレンチ全景（北から）……13
PL.6　流路検出状況（南西から）……13
PL.7　１トレンチ南端部遺構検出状況（北西から）……15
PL.8　１トレンチ南端部遺構検出状況（南から）……15
PL.9　２トレンチ北側遺構検出状況（北から）……16
PL.10　２トレンチ北側遺構検出状況（北東から）……16
PL.11　２トレンチ全景（南から）……17
PL.12　２トレンチ全景（北西から）……17
PL.13　３トレンチ北側拡張部遺構検出状況（北から）……18
PL.14　３トレンチ北側拡張部遺構検出状況（東から）……18
PL.15　３トレンチ南側遺構検出状況（北東から）……18
PL.16　３トレンチ北側遺構検出状況（南東から）……18
PL.17　４トレンチ西側遺構検出状況（西から）……19
PL.18　４トレンチ内「旧谷部土層断面」（北から）……19
PL.19　４トレンチ旧谷部東側土層断面（北から）……21
PL.20　４トレンチ東側遺構検出状況（東から）……21
PL.21　５トレンチ北側遺構検出状況（南東から）……21
PL.22　５トレンチ全景（北から）……21
PL.23　国指定史跡吉武高木遺跡（西・飯盛山山頂から）……22
PL.24　遺跡内より飯盛山を望む（東から）……22
PL.25　４トレンチ遺構面埋め戻し状況（東から）……24
PL.26　５トレンチ保護層工事状況（北から）……24
第３章
PL.27　調査区全景（西から）……30
PL.28　調査区全景（南から）……30

PL.29　トレンチ土層1（東から）……31
PL.30　トレンチ土層2（東から）……31
PL.31　K140甕棺葬（北から）……32
PL.32　大形土坑検出状況（南から）……32
第4章
PL.33　1区全景（西から）……37
PL.34　拡張前1区全景（西から）……37
PL.35　1-2区全景（北東から）……37
PL.36　1-3区全景（南から）……37
PL.37　A-B土層……38
PL.38　E-F土層……38
PL.39　G-H土層……38
PL.40　I-J土層……38
PL.41　K140棺内完掘後（東から）……41
PL.42　K140棺内埋土……41
PL.43　K153（北西から）……42
PL.44　K153墓坑内副葬土器（東から）……42
PL.45　K170（北から）……45
PL.46　K164・165（北から）……45
PL.47　SC01掘り下げ部分（南西から）……53
PL.48　SC01トレンチ土層……53
PL.49　SC01 P-8出土遺土塊……55
PL.50　3区全景（西から）……57
PL.51　3区拡張部分（南から）……57

表目次

第1章
Tab.1　調査・報告書一覧……6
第4章
Tab.2　史跡地内高木地区検出甕棺・木棺墓一覧表……39

第1章　はじめに

1．遺跡の立地と環境

吉武遺跡群の位置する早良（さわら）平野は、広義の福岡平野の一部を成し、福岡市西区及び早良区を北流する室見川流域の扇状地性の河成平野部を主体としている。平野は東を油山から派生する低丘陵、西を背振山系より派生する長垂山塊によって画され、扇形状の一つにまとまった地理的空間を形成している。また博多湾に面する河口部分には砂丘と、その後背部分に湿地帯が形成され、平野内には阿蘇山噴火火砕流起源の洪積丘陵が点在している。

早良平野内では旧石器時代以降の各時代の遺構・遺物が確認されており、ここでは現代に至る歴史的概要をたどりたい。

旧石器時代の遺跡は洪積台地上及び山麓扇状地上に分布している。有田遺跡ではナイフ形石器前段階から細石器段階の石器、脇山遺跡からは細石器が出土している。その他吉武遺跡群・羽根戸原Ｃ遺跡・浦江遺跡でも遺物が認められる。

縄文時代の遺跡は前段階の遺跡に加え標高の高い山間部にも広がり、松木田遺跡では撚糸文土器期の集石が見られる。また背振山系にかかる板屋遺跡・椎原遺跡、平野部の広石遺跡からは早期～前期の土器・石器類が出土している。その後、後晩期には遺構・遺物が増加し、四箇遺跡では後期後半の湿地層からオオムギ等の栽培種子が確認され、栽培活動が行われた可能性が高いことが推定されている。また橋本一丁田遺跡からは晩期後半の遺物が多量に出土し、水田関連遺構も確認されている。

弥生時代になると平野各所の砂丘・洪積丘陵・沖積微高地・低丘陵上に遺跡群が展開し、安定した集落の形成が見られるようになる。砂丘上では西新・藤崎・姪浜遺跡が知られ、いずれの遺跡においても甕棺墓を中心とした大規模な埋葬遺構群が形成されている。藤崎遺跡群では板付Ⅱb～金海式期の区画墓・墳丘墓の可能性を有する埋葬遺構群が見られる。姪浜遺跡では弥生時代中期以降の甕棺墓・生活遺構があり、朝鮮半島産の無文土器、漢式三角縁、貝輪、貝玉等の対外的交流を示す遺物とともに、日常土器を使用した製塩の痕跡も確認されている。洪積丘陵上に位置する有田遺跡では弥生時代全期を通じた遺構・遺物が確認されており、前期末の甕棺墓から銅戈、中期後半の甕棺墓から前漢鏡・小型仿製鏡等が出土している。また、平野を画する東側低丘陵上には飯倉Ｃ（飯倉唐木）遺跡があり、前期から土坑墓・甕棺墓群が形成され始め、前期末の甕棺墓から細形銅剣２本、中期末の甕棺墓から素環頭刀子１点が出土している。四箇舶石遺跡では支石墓が現存し、周囲では甕棺墓も確認されている。平野南端部分に位置する東入部遺跡では甕棺墓・木棺墓群が前期より形成され、中期前半代には周溝による区画墓が形成され始めるが、墳丘の存在は明らかでない。ここからは前期末～中期初頭の埋葬遺構から銅剣２本、中期中頃～後半の甕棺墓から銅鉾・素環頭刀子・鉄矛・鉄鉇・鉄剣・鉄刀等が出土している。室見川左岸の野方久保遺跡では中期の甕棺から銅剣と把頭飾が出土し、後期には野方中原・野方塚原遺跡の石棺墓から鏡片が出土している。吉武遺跡群においては、前期後半代以降、非常に大規模な埋葬遺構群が形成され始めるとともに、前期末～中期初頭にかけて、青銅製武器・鏡・腕輪のほか、多量の玉類を所有する複数の木棺墓・甕棺墓が認められる。

早良平野においては副葬品のあり方からみると、前期末～中期初頭の段階で多数の青銅器・装身具を所有する吉武遺跡群と、少量の青銅器のみが副葬される周辺遺跡の間には大きな集落間格差が生じており社会的な成熟が認められるが、中期後半以降の段階ではより突出した個人への権力の集中は認められず、隣接する福岡平野、糸島平野に比べて各集団の統合が緩やかな地域であったことをうかがうことができる。

Fig.1　調査地点位置図（1/50,000）

古墳時代の室見川流域における首長墳を見ると、4世紀代には河口近くの左岸に五島山古墳（円墳）、右岸には藤崎遺跡の方形周溝墓群が確認されている。この後、前方後円墳である羽根戸南古墳群Ｇ－２号墳（全長26m）、Ｇ－３号墳（19.6m）が築かれ、ついで中流域右岸には平野最大の前方後円墳である狸塚古墳（全長75m、５世紀前半）が作られる。また、これと対峙するように左岸地域では帆立貝式の穂波古墳（全長38m、５世紀中頃）が築かれた後、ややおいて再び羽根戸古墳群Ｆ－２号墳（帆立貝式、全長16.3m）、終末期には巨石墳である夫婦塚１号墳・２号墳（市指定史跡）が存在する。これらの古墳の多くが吉武遺跡群から半径５kmほどの位置にあり、室見川左岸の丘陵上に立地することは注目される。また後期には飯盛山麓を中心とする長垂丘陵上及び油山西麓上に多くの群集墳が形成されている。本地域の群集墳には鋳造鉄斧、鉄製鍛冶具他の鉄器類、陶質土器等の渡来系遺物が副葬されるものも多く見られる。また鉄滓供献から推定できるように、この時期には鉄生産も開始されたものと考えられ、須恵器生産等を含めた当時の先進技術を受容した地域として特色付けられる。

古代には行政区画として筑前国早良郡となり、「和名抄」によると七郷が知られ、吉武遺跡群周辺は平群郷（へぐりごう）に比定されている。当時、大宰府を基点とした古代官道である西海道が確認されており、有田遺跡では官道に近接して早良郡衙推定遺構群が確認されている。また都地遺跡、吉武遺跡群、城田遺跡をはじめとして平野内各所で大型建物・瓦・墨書土器等から官衙的な遺構の存在が推定されている。なお古代道路については地域の重要幹線道路網を含め、各遺跡間を有機的に結びつける道路についても確認例は非常に少ない。

中世には現在も痕跡をとどめる条里地割に沿う大規模な水田開発が行われ、景観的には近現代につながる村落景観が形作られた。また居館跡が都地遺跡、清末遺跡などで確認され、有田遺跡には小田部城跡、西油山には荒平城跡の中世城郭が築かれるようになる。早良郡の惣社である飯盛神社は社伝によると貞観元年（859年）社殿建立と伝えられ、飯盛山全体を神域とし中近世を通じて郡内一円の信仰を集め、広大な社領を有した。飯盛山山頂の上宮跡からは永久２年（1114年）銘をはじめとする瓦経が出土している。なお、現本殿は下宮にあたり市指定有形文化財となる。また南北朝期製作と考えられる宋風石造狛犬は県指定有形文化財、飯盛神社文書が市指定の有形文化財である。また無形民俗文化財として、県指定の飯盛神社のかゆ占、市指定の飯盛神社流鏑馬行事が伝えられており、豊かな文化遺産を現代に継承している。

近世には福岡藩領となりほぼ全域が早良郡に属する。筑前国続風土記によれば90村、石高約3,700石、家屋3,519軒、人口24,000人とあり、山海の品も多く、水田も広がるがあまり肥沃ではないと記載されている。また当時室見川に放流したシロウオは現在でも早春を彩る風物詩となっている。

明治22年には町村制施工に伴い１町５村となり、昭和になると福岡市への編入が進み、早良町が西区に編入された昭和50年（1975年）に早良平野全域が福岡市となり現在に至っている。

２．これまでの調査概要

吉武遺跡群は室見川中流域左岸に広がる段丘上に立地し、その名のとおり飯を盛り上げたような形で、平野のランドマーク的存在となっている飯盛山（いいもりやま）の東麓に展開する遺跡群である。その範囲は南北約１km、東西最大700mを測り、遺跡面積は約40haである。また、現標高は南～西側が30m、東～北側が15～20mである。現在は都市化の進行に伴い周辺景観は大きく改変されているが、弥生時代には室見川沿いから砂丘後背に広大な低地が広がっており、博多湾が一望できる場所であったと考えられる。

吉武遺跡群においてはこれまでに圃場整備・道路建設・下水道建設・史跡整備等に伴い19次の調査

が行われ、総面積約130,000㎡を超える調査の結果、旧石器時代～近世にかけての濃密な遺構・遺物が確認されている。

時期毎の概要を見ると、後期旧石器時代末期に位置付けられる細石器文化期の良好な石器群が遺跡群南部（９次）で認められ、縄文時代では東側縁辺部分（２次）で中期～後期初頭の貯蔵穴等が確認されている。

弥生時代になると前期後半～後期末の大規模な集落・埋葬遺構等がほぼ全域にわたって展開している。集落の形成は前期後半に遺跡群北端部で始まっている。ここでは２群の竪穴住居群が見られ、これに近接する時期の甕棺墓・土坑墓が確認されている。続く前期末～中期前半段階には前代に見られた北端部地域に加え南側（６・９次）で遺構が確認されている。ここでの生活関連遺構は６次地点東側で確認された掘立柱建物群の他はほとんど確認されていないが、埋葬遺構関係では６次地点で前期末～中期前半にかけて豊富な副葬品を有する木棺墓・甕棺墓で構成された「特定集団墓」が形成され、９次地点においても青銅器の副葬が行われている。また総数2000基以上ともいわれ、調査時に「甕棺ロード」と呼ばれた広大な墓域の形成が始まる。中期中頃～後半段階では北端部の集落は引き続いて営まれ、これに近接した小規模な甕棺墓群も認められる。また遺跡群中央部付近にも掘立柱建物群が認められる。この時期、４次地点には墳丘墓が造られ、隣接する９次地点の墓地は中期後半にかけてさらに継続して営まれている。６次地点東側で確認された大型建物も中期後半以降に位置付けられるが、この他周辺では竪穴住居跡・掘立柱建物がまとまって確認されている。後期前半は規模が縮小する時期で、生活遺構も散漫となり、埋葬遺構は「甕棺ロード」の西南端部にまとまる。

古墳時代では中期～後期を主体とした遺構・遺物が確認されている。前述の弥生時代墳丘墓上に形成された前方後円墳である樋渡古墳（古式Ｓ１号墳）、これに隣接する方墳（Ｓ２号墳）、円墳（Ｓ３～Ｓ28号墳）が５～６世紀にかけて造営され、これに伴う集落も広い範囲で確認されている。この時期には陶質土器・軟質土器・算盤形紡錘車・各種鉄製品等半島系渡来人の存在を強く想起させる遺物が多量に出土しており、弥生時代の遺構・遺物とともに吉武遺跡群の性格をよく示している。この他、自然流路から農具・容器類・ミニチュアの準構造船・木製鞍・鐙などの木製品も出土している。

奈良時代には建物群及び方形区画溝が確認され、越州窯系青磁・墨書土器・円面硯・瓦が出土しており、古代寺院が存在したものと考えられている。また多量の鍛冶滓が確認されるとともに鍛冶関連遺構も確認されており、前代に引き続き鉄器生産が行われている。

続く平安時代には、９次調査地点を中心として、方形区画溝内に建物・井戸・道路が確認されており、各施設が区画された官衙と考えられている。各遺構からは多量の瓦、鉄滓のほか、越州窯系青磁、邢窯・定窯系白磁、「寺」「群」の墨書・刻書、八稜鏡など豊富な遺物が出土している。

近世には樋渡古墳上に18・19世紀代の墓地が営まれる。

国史跡「吉武高木遺跡」指定地は６次（高木地区）・９次（大石地区）調査地点の一部で、吉武遺跡群の南東部に位置する。面積は42,145.17㎡で吉武遺跡群のおおよそ１/10を占める。平成20年度末までの指定地内での調査面積は約14,500㎡におよび、指定地の約35％について調査が行われていることとなる。

指定地は飯盛山山麓東側に形成された扇状地形の末端部分にあたり、中央部には幅30～80ｍの浅い谷地形が東西方向に入り込んでおり、微高地を南北に分けている。

指定地内で遺構が確認されるのは弥生時代前期末からである。高木地区では前期末～中期初頭の甕棺墓・木棺墓で構成された墓群が確認されている。ここでは７基の甕棺墓及び４基の木棺墓から副葬

Fig.2　吉武遺跡群調査地点位置図（1/5,000）

吉武遺跡群調査一覧

次数	調査番号	調査原因	調査期間	調査面積(㎡)	概　　要
1	8102	圃場整備	1981.11.01～1982.03.15	12,000	弥生時代前期後半～中期の生活遺構・埋葬遺構。生活遺構は後期も認められる。 古墳時代初頭の生活・祭祀遺構。河川は弥生時代中期～古墳時代後期まで使用する。 中世の溝・井戸を確認。
2	8234	圃場整備	1982.09.01～1983.02.15	20,768	縄文時代後期初頭の貯蔵穴。 弥生時代中期～後期の住居跡・掘立柱建物・溝などで、埋葬遺構はわずか。 古墳時代の生活遺構は住居跡・掘立柱建物・溝など。 奈良時代の溝。
3	8235	道路建設	1982.09.22～1983.02.12	5,200	古墳時代の生活遺構が大半を占め、半島系の遺物や初期須恵器等が出土する。
4	8335	圃場整備 (樋渡地区)	1983.09.12～1984.03.24	25,000	弥生時代の生活遺構は後期の住居跡・溝がわずか。埋葬遺構は墳丘墓とこの周辺を中心として140基以上を確認した。墳丘墓の甕棺は中期中頃～後半で、甕棺墓 6基と木棺墓 1基から青銅製武器、把頭飾、前漢鏡、鉄製武器、玉類等が出土。 古墳時代は住居跡・掘立柱建物・土坑・井戸・溝・河川等があり、初期須恵器・陶質土器・木器等が出土。 5世紀前半の前方後円墳(樋渡古墳)、5世紀中頃の方墳各1基と6世紀後半以降の円墳2基を確認。 奈良時代には製鉄関連遺構・道路などを確認する。
5	8415	道路建設	1984.04.13～1984.05.31	1,600	古墳時代中期の生活遺構を主体とする。
6	8416	圃場整備 (高木地区)	1984.07.01～1985.03.20	26,000	弥生時代の生活遺構は中期の掘立柱建物が主体となり44棟が確認され、中期後半には大型建物が認められる。埋葬遺構は570基以上を確認する。中でも青銅製武器・鏡・腕輪、玉類など多量の副葬品を有する「特定集団墓」は規模・内容ともに卓越したものであり、今回の調査によって副葬品を有する中核的な墓群は18×20mの略方形区画を有するものと考えられる。また、南西側では「甕棺ロード」の一部を確認している。 古墳時代の古墳21基からは、大陸との交渉を示す遺物が多く出土。生活遺構は住居跡14棟、掘立柱建物など。 古代では瓦、硯など寺院の存在が考えられ、鍛冶炉も21基確認。 河川より龍泉窯系青磁が多量に出土。中世集落は現在のものと重複するものと考えられる。
7	8426	道路建設	1985.03.26～1985.05.31	2,300	弥生時代中期前半～後期初頭の76基の甕棺墓を検出。「甕棺ロード」の南西端に位置する。
8	8518	圃場整備	1985.07.02～1985.07.24	470	高木地区埋葬遺構群の範囲確認調査。
9	8535	圃場整備 (大石地区)	1985.08.01～1986.03.31	28,000	600点を越す、旧石器時代の遺物が出土。 弥生時代中期の住居跡は1棟、中期～後期の土坑多数確認。埋葬遺構は数地点で金海式甕棺期に始まる「甕棺ロード」の形成が始まる。幅50m、長さ450m程度と推定。 1000基余りを調査したが、大半は副葬品を持たない。15基の甕棺墓・木棺墓より青銅製武器、石鏃、石剣切先等が出土するが、装身具は非常に少ない。 古墳時代の生活遺構は多数検出。古墳1基からは陶質土器等が出土。 奈良～平安の区画溝・掘立柱建物とともに、多量の瓦、鉄滓のほか、越州窯系青磁、邢窯・定窯系白磁、「寺」「群」の墨書・刻書、八稜鏡など豊富な遺物が出土している。
10	8650	圃場整備	1986.11.16～1987.02.27	5,000	大石地区の追加工事に伴う調査。
11	8662	道路建設	1986.03.01～1986.05.10	2,300	古墳時代後期の生活遺構と古墳1基。
12	8714	道路建設	1987.06.01～1987.09.09	1,480	近世前半の溝。
13	8752	圃場整備	1988.03.01～1988.03.31	1,000	大石地区暗渠排水工事。古墳時代後期の溝に排水路設置。
14	8838	圃場整備	1988.07.25～1988.09.16	724	弥生時代中期の生活遺構が主体を占める。
15	9940	下水道建設	1999.09.06～1999.09.08	37	遺跡群南端部の調査で、弥生・古墳時代の生活遺構を確認。
16	0311	下水道建設	2003.05.09～2003.05.18	62	弥生時代中期の生活遺構。
17	0363	史跡整備	2004.01.09～2004.03.18	753	史跡指定地内確認調査（旧地形及び遺構分布確認）
18	0483	史跡整備	2005.01.26～2005.03.09	720	史跡指定地内確認調査（高木地区墳丘確認）
19	0534	史跡整備	2005.07.19～2005.09.22	970	史跡指定地内確認調査（高木地区墓域・大型建物関連遺構確認）

吉武遺跡群関係報告書一覧

タイトル	副　　題	集数	発行年度	概　　要
吉武遺跡群Ⅰ	市道田・飯盛線関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ	127	1986	3次調査報告
吉武高木	弥生時代埋葬遺構の調査概要	143	1986	6次調査埋葬遺構・出土遺物を中心とした概要
吉武遺跡群	市道野方金武線建設に伴う埋蔵文化財の調査	187	1988	7次調査報告
吉武遺跡群Ⅳ	市道田・飯盛線関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ	194	1989	5次調査報告
吉武遺跡群Ⅴ	市道野方金武線建設に伴う埋蔵文化財の調査	303	1992	11・12次調査報告
吉武遺跡群Ⅶ	飯盛吉武圃場整備関係調査報告書1	437	1995	1・2・4・6・8・9次調査概要、1・2・6・8次調査弥生時代掘立柱建物
吉武遺跡群Ⅷ	飯盛吉武圃場整備関係調査報告書2	461	1996	4・6・8・9次調査弥生時代主要埋葬遺構（副葬品を有する埋葬遺構）
吉武遺跡群Ⅸ	飯盛吉武圃場整備関係調査報告書3	514	1997	1・2・4・6・9次調査弥生時代生活遺構
吉武遺跡群Ⅹ	飯盛吉武圃場整備関係調査報告書4	580	1998	1・2次調査弥生時代埋葬遺構、6・9次調査弥生時代前期～中期初頭埋葬遺構
吉武遺跡群ⅩⅠ	飯盛吉武圃場整備関係調査報告書5	600	1999	1・2・4・9次調査弥生時代埋葬遺構（4次：樋渡墳丘墓、9次：甕棺ロード関係）
吉武遺跡群ⅩⅡ	飯盛吉武圃場整備関係調査報告書6	650	2000	4・6・8・9次調査弥生時代埋葬遺構、弥生時代総括
吉武遺跡群ⅩⅢ	飯盛吉武圃場整備関係調査報告書7	675	2001	1・2次調査縄文時代、古墳～平安時代
吉武遺跡群ⅩⅣ	飯盛吉武圃場整備関係調査報告書8	731	2002	上巻：4次調査S1（樋渡古墳）・2号墳、下巻：9次調査旧石器時代
吉武遺跡群ⅩⅤ	飯盛吉武圃場整備関係調査報告書9	775	2003	6・9次調査古墳（吉武古墳群S群）、9次調査古墳時代埋葬遺構
吉武遺跡群ⅩⅥ	飯盛吉武圃場整備関係調査報告書10	831	2004	4・6・9次調査古墳時代竪穴住居跡
吉武遺跡群ⅩⅦ	飯盛吉武圃場整備関係調査報告書11	864	2005	9次調査古墳時代生活遺構
吉武遺跡群ⅩⅧ	飯盛吉武圃場整備関係調査報告書12	911	2006	4・6次調査古墳時代生活遺構
吉武遺跡群ⅩⅨ	飯盛吉武圃場整備関係調査報告書13	965	2007	4・6・9次調査古代～近世
吉武遺跡群ⅩⅩ	飯盛吉武圃場整備関係調査報告書14	1018	2008	圃場整備関係調査総括
吉武遺跡群21	金武圃場整備に伴う吉武遺跡群第14次調査報告、大北遺跡第1次調査報告	1017	2008	14次調査報告

Tab.1　調査・報告書一覧

品が出土し、青銅製武器及び装身具（翡翠製勾玉・碧玉製管玉）を伴うものと装身具（翡翠製勾玉・碧玉製管玉・鋼釧）のみのものに分類できる。なかでも第３号木棺墓からは細形銅剣２口、細形銅矛１口、細形銅戈１口、多鈕細文鏡１面、翡翠製勾玉・碧玉製管玉が出土しており、他に比して、卓越した明らかな集中的副葬が認められる。

また、大石地区では前期末～中期前半の甕棺墓11基、木棺墓４基の計15基から青銅武器、石剣、副葬土器などが出土しているが、集中した所有は認められず、装身具も非常に少ない。大石地区では中期後半まで造墓が続いており、結果的には副葬品をほとんど持たない共同墓地である「甕棺ロード」に吸収されていく。なお「甕棺ロード」は低い丘陵の稜線に沿って延長450m、甕棺推定個数2000基以上で構成されていると考えられ、前期末に数箇所で埋葬が開始され、中期段階の甕棺が主体となり後期までの間に、結果的に帯状の巨大な墓地群が形成されたものである。

生活遺構は中期前半～後半の掘立柱建物が指定地南東部高木地区にまとまり、特に後半段階にもっとも広がりを見せている。またこの地点には中期後半に４間×５間の大型掘立柱建物が造られている。この他中期初頭～後期の竪穴住居跡・土坑・溝等が確認されているが、時期的なまとまりを抽出するには至っていない。北側の大石地区では生活遺構の確認は少なく、明らかなものとしては竪穴住居跡１棟のみである。以上のように濃密な埋葬遺構群に比べ、生活遺構の確認状況は比較的散漫な状態であり、さらに後期に至ると遺構全体が希薄となる。

Fig.3　史跡指定範囲図（１/2,000）

3．確認調査に至る経緯と各調査の目的

史跡「吉武高木遺跡」の発見から史跡指定そして現在の整備に対する取り組みについては、2008年発行の『吉武遺跡群』ＸＸ　―飯盛吉武圃場整備関係調査報告書14―　総集編　福岡市埋蔵文化財調査報告書第1018集に詳述されており、これを参照いただきたい。ここでは多くが重複するが、確認調査にいたる経緯について簡単にたどっておきたい。

「吉武高木遺跡」保存の契機となったのは昭和56年度～60年度にかけて行われた「飯盛吉武地区土地改良事業」にともなう、吉武遺跡群の発掘調査である。特に昭和58年度の４次調査（樋渡地区）、59年度の６次調査（高木地区）、60年度の９次調査（大石地区）において、多量の副葬品を有する弥生時代の木棺墓・甕棺墓が確認されるとともに、墳丘墓・大型掘立柱建物等が発見され、吉武遺跡群が弥生時代の「クニ」の成立と展開を考える上で極めて重要な遺跡であることが判明した。この結果を受けて６・９次調査地点においては土地改良組合との協議の結果、工事内容の設計変更を行い、可能な範囲で遺跡の保存を図り、圃場整備事業を行うこととした。

その後、平成４年度当初より、文化庁から吉武遺跡群内の高木地区と大石地区について、早急な地元同意の取り付けと史跡指定に関する指導を受け、７月より地元・地権者説明会を開き、同意取り付け作業を開始した。その結果、平成４年９月17日付け、福市教埋第330号において、同意の得られた14筆（申請当初面積24,988㎡：実測面積25,104.26㎡）について、文部大臣宛に史跡指定申請書を提出し、平成５年10月４日付で史跡「吉武高木遺跡」として告示を受けた。

ついで、平成６年２月４日付け、福市教埋第1032号により、５筆（申請当初面積12,018㎡：実測面積12,074.87㎡について追加指定の申請が行われ、これについては平成12年９月21日付けで告示を受けた。更に、平成12年３月６日付け、福市教埋第652・653号により、農地１筆（2,316.69㎡）と福岡市所管の公衆用道路４筆（一部及び全部：1,571.51㎡）、及び建設省所管の用悪水路５筆（一部及び全部：1,077.84㎡）のあわせて4,966.04㎡（実測面積）について追加指定の申請が行われ、平成12年９月６日付けで告示を受けた。この結果あわせて29筆、実測面積42,145.17㎡が国指定の史跡として保存されることとなった。

また、史跡指定に先立って、４・６・９次調査で出土した青銅鏡・武器、鉄器、装身具など645点（附30点）が、「筑前吉武遺跡出土品」として昭和62年６月６日付で、重要文化財（考古資料）に指定された。なお指定に当たっては昭和62年２月２日付け、庁保記第41号において、国保有とすることが通知され、現在福岡市博物館において保管されている。

史跡指定後、歴史公園として広く公開活用を図るため、民有地（39,495.82㎡）については、平成11

PL.1　６次調査（高木地区）甕棺・木棺墓群（南から）

PL.2　９次調査（大石地区）「甕棺ロード」（東から：奥は飯盛山）

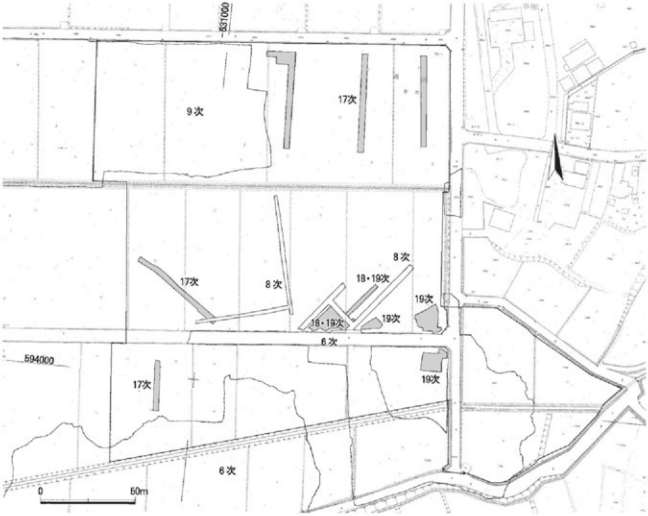


Fig.4　史跡地内調査地点位置図（1/2,000）

～14年度に土地公有化を行った。これと並行して農業振興地域農用地区域除外及び農地転用許可については平成11年10月に農業委員会に対して付議を行い、平成12年5月15日に農地転用の許可を受けるとともに、平成11年12月に福岡市都市計画審議会に対し、歴史公園としての都市計画決定について付議を行い、平成12年3月16日に「吉武高木遺跡公園」の決定告示が行われた。

史跡「吉武高木遺跡」の環境整備事業に関しては、平成5年に有識者からなる「吉武高木遺跡調査研究指導委員会」が設立され、平成11年度まで7回にわたって、調査された遺構・遺物に関する検討が行われた。委員会は平成12年度より「吉武高木遺跡整備指導委員会」と名称を変更し、現在までに整備基本構想・整備基本計画・基本設計に関わる検討を行い、歴史的景観や自然環境を保全した上で、「聖なる弥生の丘」を基本テーマとした整備の方向性が示された。その後、整備計画・設計案を策定していく上で、未調査部分の遺構分布や旧地形に不明瞭な点があるため、平成15年度より3ヵ年にわたり、国庫補助金による確認調査を行うこととした。各年度の調査の目的は、平成15年度は指定地内の未調査部分における遺構分布状況の確認と、中央部に位置する谷地形の形状及び形成時期の確認とした。平成16年度は、多量の副葬品が出土した高木地区の甕棺・木棺墓群（特定集団墓）の範囲確定と墳丘の有無を中心とした構造の確認とした。平成17年度は大型掘立柱建物に付随する関連遺構の精査を行うとともに、前年度に引き続き高木地区の特定集団墓の範囲について明らかにすることを目的としている。なお、確認調査の遂行に当たっては、文化庁及び指導委員会による指導を仰ぎながら行った。

PL.3　圃場整備以前航空写真（枠内が指定地）

PL.4　現況遠景（写真上部は博多湾：枠内が指定地）

第２章　第17次調査報告

１．調査の経緯

吉武遺跡群は、早良平野を北流して今津湾に注ぐ室見川の中流域左岸に位置し、標高388ｍを測る飯盛山の東麓に広がる扇状地上（標高25～30ｍ）に展開する。検出される遺構は弥生時代から古墳時代を主体とし、古代まで存続する複合遺跡である。遺跡範囲は約40ha前後の規模が考えられており、昭和56年度から平成20年度までに19次の発掘調査が行われ、特定集団墓や甕棺列埋葬が確認された高木・大石地区では42,145.17㎡が国指定史跡として保存されている。

今回報告する第17次調査は、将来的な史跡整備のため、史跡指定範囲地内の未調査部分について遺構の分布状況を把握するために行った確認調査である。指定範囲地内に計５本のトレンチを設定し、表土除去後に遺構検出作業を行った。１～３トレンチは史跡指定地内北東部に、４・５トレンチは史跡指定地内中央部～南西部に設定した。

今回の確認調査は、未調査部分の遺構分布状況の確認と史跡指定範囲内中央部に東西方向で存在している谷地形の形成年代の確認を主な目的としている。そのため各トレンチ遺構面において確認・検出した遺構の掘り下げは行っていない。これにより各遺構の時期や時期的な遺構分布状況については明確にできていない部分が多い。しかしながら、遺構の埋土観察や遺構検出面での精査時に出土した遺物の観察により、検出した遺構の多くが古墳時代に属する遺構であることが推測された。特に史跡指定地内北東部については、古墳時代の集落造営によって弥生時代の遺構は大部分が失われているものと考えられる。

発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行うこととなり、条件整備の整った平成16年１月19日に着手し、平成16年３月18日に終了した。なお、各トレンチで検出された遺構面上には調査終了後に真砂土を20㎝程度敷き詰め保護層とし、埋め戻しを行っている。

２．調査体制（平成15年度）

調査主体	福岡市教育委員会	教育長	生田　征生
調査総括	同	文化財部　部長	塀　　徹
	同	埋蔵文化財課　課長	山崎　純男
	同	埋蔵文化財課　第２係長	田中　壽夫
	同	文化財整備課　整備係長	横山　邦継
調査庶務	同	文化財整備課　管理係	御手洗　清
調査担当	同	文化財整備課　整備係	榎本　義嗣（条件整備等）
	同	埋蔵文化財課　第２係	本田　浩二郎（本調査）
調査作業		地元雇用	

遺跡調査番号	0363	遺跡略号	YST17
調査地地番	福岡市西区大字吉武地内	分布地図番号	93－0405
開発面積		調査面積	753㎡
調査期間	2004.01.19～2004.03.18	調査原因	史跡整備

3．調査の目的と方法

史跡指定地内の未調査部分について、遺構の分布状況を把握するために平成15年度は計５本のトレンチを設定し遺構確認調査を行った。未調査部分はいずれも圃場整備時に盛り土保存されており、遺構は良好に遺存している。なお、各トレンチの合計調査面積は753㎡となる。

各トレンチは前年度（平成14年度）の調査指導委員会により、以下の項目を確認するため設定されている。

１・２・３トレンチ→史跡指定地内北東部の未調査区において、大石地区「甕棺ロード」の延伸状況や生活遺構の有無確認を行う目的。

４トレンチ→史跡指定地内中央部を東西方向に横断する「旧谷部」の形成時期の確認を行い、大石・高木両墓地間の地形を把握する目的。

５トレンチ→史跡指定地区南西部の未調査区における遺構の分布状況を把握する目的。

調査は各トレンチともにバックホウによる盛り土層を除去後，人力により包含層の掘り下げ及び遺構検出を行った。記録作成・測量方法としては調査区および各トレンチ周辺に国土座標を打設し、１/200縮尺でトレンチ位置図の作成を行った。各トレンチ内では２m方眼を組んで，１/100縮尺で遺構等の検出状況実測図を作成した。土層断面図は１/40縮尺で作成し、個別遺構図は１/20縮尺で作成した。これらの確認調査と同時に各トレンチに国土座標第二系・世界測地系を使用して、史跡指定地内における正確な位置関係を数値化し記録することも行っている。

以下に各トレンチの概要および出土遺物について説明する。

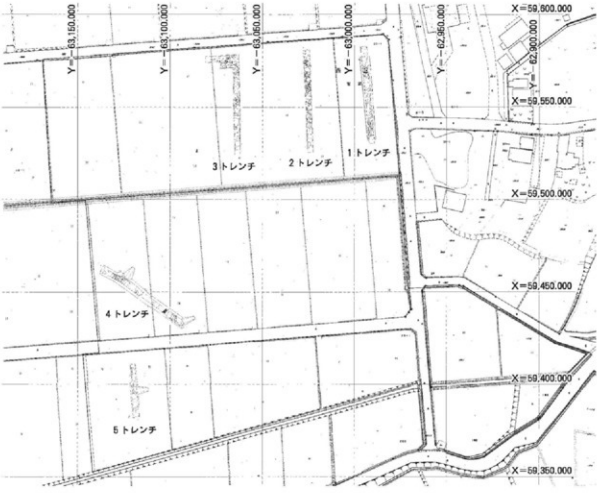


Fig.5　第17次調査トレンチ位置図（S＝1/2000）

4．調査の概要

本調査は史跡指定地内の未調査部分についての確認調査であり、遺構分布状況の確認を目的として行った。史跡指定地内北東部に並行して設定した1～3トレンチでは、主に古墳時代の竪穴住居・土坑・溝などの遺構が検出された。3トレンチは大石地区で検出された甕棺の列埋葬の延伸状況を確認するために設定し、一部拡張して検出作業を行ったが、トレンチ内では甕棺墓と見られる掘方は検出されなかった。検出された住居は平面形が方形を呈し、一辺5m前後を測る。

史跡指定地内中央部で設定した4トレンチでは高木・大石地区を画するように位置する谷地形や弥生時代の円形住居・土坑・溝などの遺構が検出された。谷内部には圃場整備以前まで流れていた小河川が検出され、両岸は水田によって地形改変を受けている。土層断面からは形成時期は判然としないが、この流路の延長部分となる1トレンチ内で自然流路が検出されており、古墳時代以前から規模は不明確ながら流路（小河川）が存在していたことが確認できた。5トレンチは南側が削平により遺構が消滅していたが、北側では土坑などの遺構が検出された。

遺物は、遺構検出時に甕棺などを含む弥生土器・土師器・須恵器・黒曜石剥片などがコンテナケース6箱分が出土した。なお、本章で用いている方位は座標北（真北）を示す。

（1）1トレンチ （Fig.8）

1トレンチ付近の現地表面の標高は23.1m前後を測り、遺構検出面の標高は22.2m～21.9mで北側に傾斜する緩斜面上で遺構を検出した。トレンチ調査は面積125.06㎡を測る。遺構面上には90cm～1.2m前後の厚さで盛り土がなされており遺構面は良好に保存されていた。遺構検出面は褐色シルト層・青灰色シルト層・砂礫層で交互に形成されており扇状地の堆積状況を反映している。遺構面の南端と北端の比高差は35cm程度で全体的に緩やかに北側に傾斜するが、トレンチ中央部付近の流路が確認された範囲は一段低く窪んだ状況となり標高は21.7m前後を測る。

検出した遺構は柱穴・土坑（不定形・楕円形等）・自然流路等である。トレンチ南側の遺構面上には弥生時代から古墳時代の遺物を含む包含層が厚さ25cm前後で堆積するが、北側部分では包含層の形成は薄く遺構の密度も低い。遺構検出時に、弥生土器・土師器・須恵器・黒曜石剥片などが出土している。トレンチ中央部で検出した流路（2号遺構・3号遺構）は検出した範囲から南西方向から北東方向への流れが復元でき、数回の切り合いが認められた。また、これらの流路に削られた方形土坑や埋没後に掘削された柱穴も検出されている。これらの遺構は埋土観察より弥生時代から古墳時代のものであり、該期に旧谷部内に河川が存在していたことが分かる。この流路は旧谷部のコーナー部付

PL.5　1トレンチ全景（北から）

PL.6　流路検出状況（南西から）

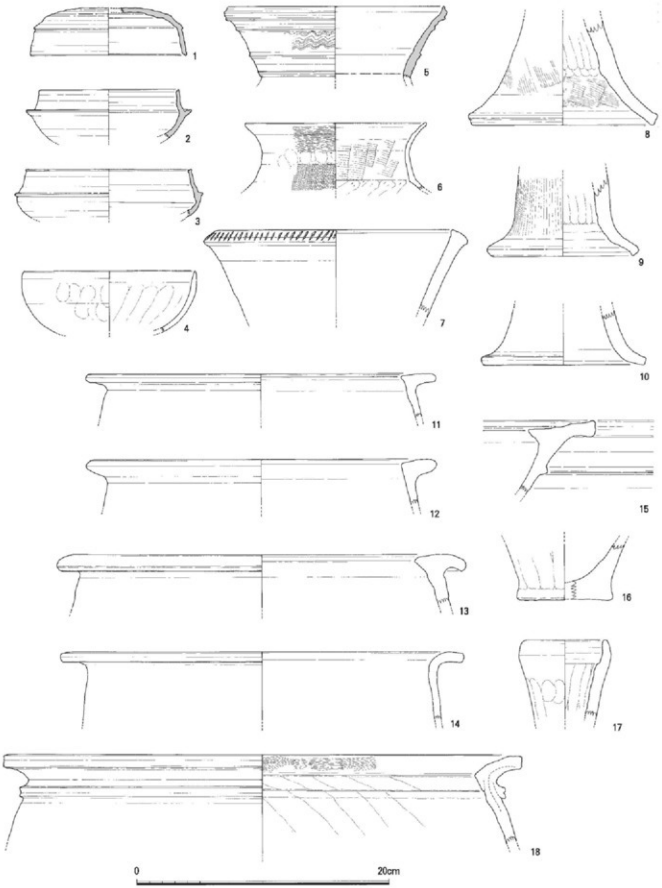


Fig.6　1トレンチ出土遺物（1）（1/3）

近からの河川氾濫によって形成されたと考えられるが、30m西側の2トレンチ南端部では検出されておらず、2トレンチ南側をかすめるように形成されたものと考えられる（Fig.13参照）。流路は幅6m程度を測り、埋土は拳大の礫・砂礫層・シルト層が交互に堆積する。流路埋土内からは弥生時代から古墳時代の遺物が出土した。トレンチ北端部では砂礫層が露頭しており、暗褐色シルトの埋土を持つ掘立柱建物が検出された。この掘立柱建物の主軸はN-68°-E前後を採る。

出土遺物をFig.6・8に示した。

1は須恵器蓋である。2・3は須恵器坏である。4は土師器坏である。5は須恵器壺口縁部である。6は弥生土器壺である。7は弥生土器壺口縁部である。口唇部に刻み目を巡らす。8～10は弥生土器器台である。11～14・18は弥生土器甕口縁部である。15は弥生土器広口口縁壺口縁部片である。16は弥生土器甕底部片である。17は土師器壺口縁部片である。

19～23は2号遺構とした自然流路埋土内からの出土遺物である。19は須恵器坏である。20は弥生土器壺底部片である。21は弥生土器甕底部片である。22は土師器高坏脚部片である。23は弥生土器甕口縁部片である。24は須恵器壺口縁部片である。25・26は3号遺構とした流路から出土した遺物である。25は土師器壺口縁部片で、26は土師器坏である。

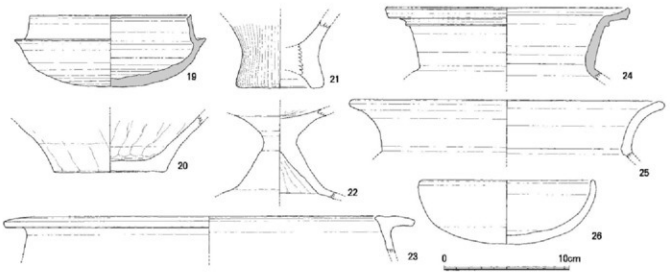


Fig.7　1トレンチ出土遺物（2）（1/3）

PL.7　1トレンチ南端部遺構検出状況(北西から)

PL.8　1トレンチ南端部遺構検出状況(南から)

（2）2トレンチ（Fig.7）

2トレンチは標高23.5m前後を測る田面平坦面上で設定した。遺構検出面の標高は22.8m～22.2m、遺構検出面の南端と北端の比高差は65cm前後を測り、北側に緩やかに傾斜する。全体的に40cm前後盛り土されており、旧水田床土直下で遺構面を検出した。トレンチ中央部と北端部での比高差は40cm前後を測り、中央部北側付近ではシルト質の遺構面となるが、トレンチ南端と北端部は砂礫層で遺構を検出している。遺構面上で確認した堆積土層の差異はほぼ等高線と並行となり、扇状地地形の堆積状況を示しているものと考えられる。検出した遺構は方形住居・柱穴群・土坑群（不定形・楕円形など）・溝などである。トレンチ調査面積は147㎡を測る。

検出された住居群は平面形が方形を呈し、検出した部分より一辺5m前後の規模が推定される。検出した住居群（5・7号遺構等）は主軸をN-52～55°-Wの方向に採るものが多く、周囲で検出される長方形土坑（4号遺構）も同方向の主軸を持つものが見られる。今回のトレンチの調査範囲では、これらの遺構が採る主軸方向の規則性については解明できない。

トレンチ北側で検出された溝状遺構（10号遺構）は、1・3トレンチでは検出されていないが、ほぼ東西方向の主軸を採り、他の遺構と異なり黒褐色粘質土の埋土であることから、古代の時期と考えられる。トレンチ中央部から北側にかけては遺構密度が濃密で、土坑・柱穴などの遺構が重複して検出される。この範囲では住居壁溝隅部とみられるL字状の溝が複数検出されており、床面以下まで削平された住居群の存在も推測できる。

トレンチ南側では遺構密度は薄くなっており、これは圃場整備以前の開墾等や1トレンチで確認された流路を形成した氾濫等により削平された可能性が考えられる。1～3トレンチ南側には圃場整備以前に使用されていた道路が存在しており、これが谷北側堤防の役割を成していた（Fig.14参照）。圃場整備以前の谷地形は竜谷川の開析作用で大きく削られ、旧道路面からは3m以上の比高差が生じていた。1トレンチで検出された自然流路が形成された弥生～古墳時代の段階では、他のトレンチ調査の成果やこれまでの調査成果より幅10m程度の浅い谷地形であったと考えられる。現在のトレンチの南側には圃場整備時に敷設された用水路が存在しているが、用水路工事範囲での試掘調査では遺構は確認されていない。よってトレンチ南端と用水路の間に旧谷部の北側肩または氾濫流路が存在していると推測される。また他のトレンチでの遺構検出状況から谷の肩際まで遺構は本来は存在していたものと考えられる。本格的な整備段階に谷地形については詳細な調査を行う必要があろう。トレンチ中央部で検出された灰色シルトの埋土を持つ溝状遺構（12号遺構）は圃場整備以前の水田用水路と位置が合致しており同一のものと考えられる。

PL.9　2トレンチ北側遺構検出状況（北から）

PL.10　2トレンチ北側遺構検出状況（北東から）

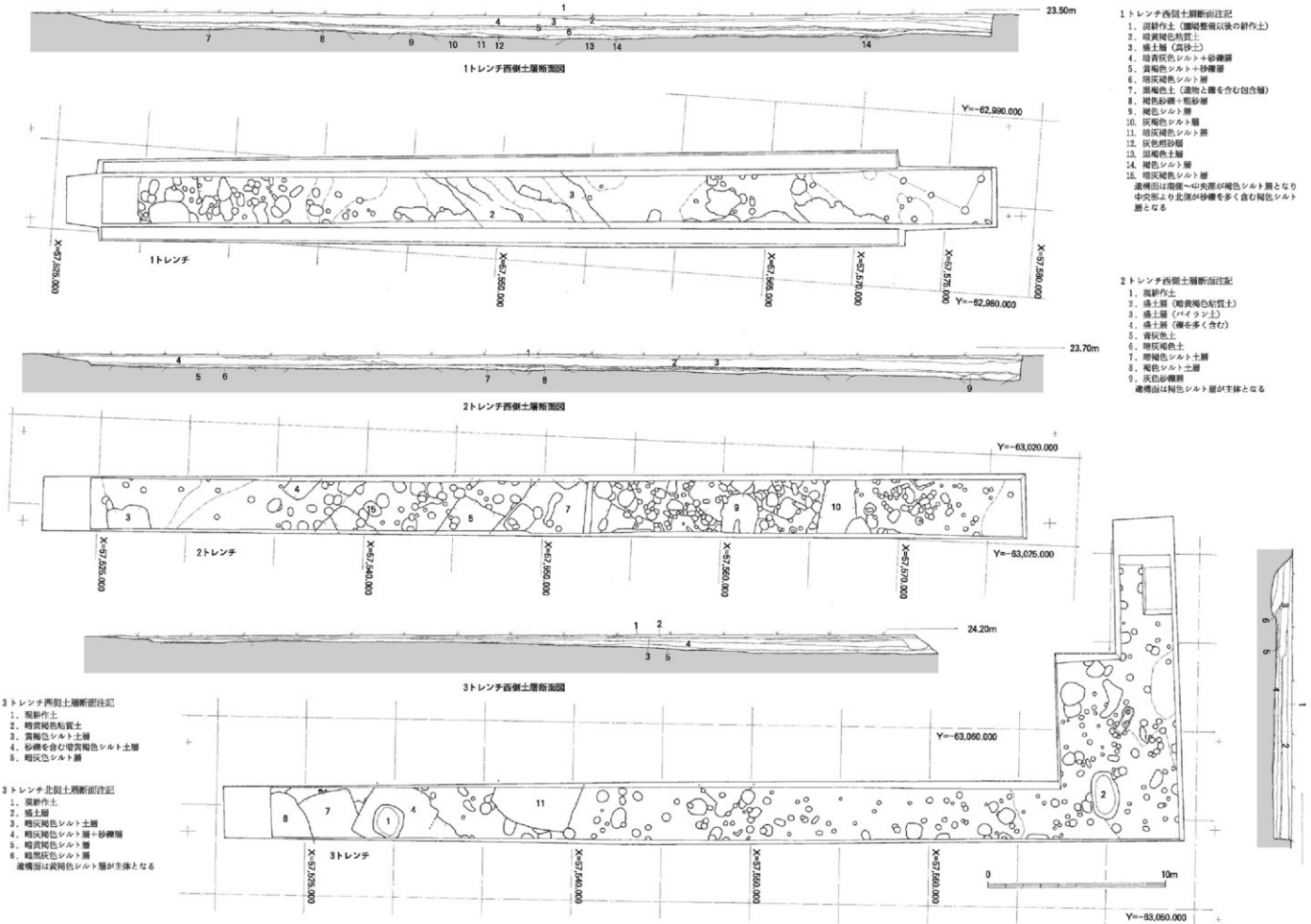


Fig.8　各トレンチ遺構配置図・土層断面図1（1/200）

PL.11　2トレンチ全景（南から）

PL.12　2トレンチ全景（北西から）

出土遺物をFig.9に示した。

27・28は須恵器蓋である。29は須恵器坏部片である。30は弥生土器壷底部片である。31は10号遺構出土の土師器高坏坏部片である。32は弥生土器である。33は弥生土器甕口縁部片である。34は5号遺構とした住居より出土した弥生土器高坏坏部片である。35・36はいずれも弥生時代前期の黒曜石剥片である。36は主要剥離面の一部に擦痕が観察できる。

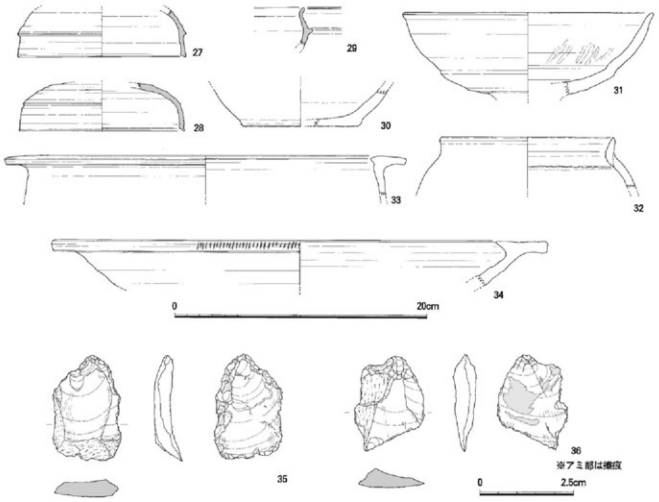


Fig.9　2トレンチ出土遺物（35・36は1/1、27～34は1/3）

（3）3トレンチ（Fig.7）

3トレンチは大石地区に近接する位置に設定したトレンチで、甕棺の列埋葬を確認するため西側方向に拡張を行ったため、トレンチ平面形はL字形を呈する。トレンチ調査面積は178.64㎡を測る。現地表面の標高は23.8m前後を測り、遺構検出面の標高は23.4m～22.8m前後を測る。1・2トレンチと同様に北側に緩く傾斜する緩斜面上において遺構を検出した。トレンチ北端部・拡張区は拳大の礫を多く含む砂礫層になり、これより南側では暗褐色シルト層が遺構面となる。

検出した遺構は方形住居群・柱穴・土坑（長方形・楕円形など）等である。住居群は南側に集中して検出されるが、2トレンチと同様に壁溝状の溝が複数検出されており本来は北側にも住居が展開していたと考えられる。住居は2トレンチ検出の住居群と近い主軸方向（N-58～62°-W）を採り、一辺4～4.5mを測る。住居埋土上面からは弥生前期の甕棺口縁部片が出土しており、トレンチ付近にも甕棺墓が点在していた可能性もあるが、いわゆる大石地区で検出された「甕棺ロード」の延長箇所付近では甕棺墓・土壙墓などは明確には確認できず、列埋葬は延伸しないものと判断された。

Fig.10に出土遺物を示した。

37・38は須恵器蓋である。39・40は須恵器坏である。41は須恵器小壺である。42は須恵器蓋である。43は土師器坏である。44は7号遺構出土の土師器壺口縁部片である。45は6号遺構出土の弥生土器器台である。46は5号遺構出土の弥生土器甕である。47は4号遺構出土の弥生土器甕である。44～47はいずれも遺構上面の精査時に出土したものであり、遺構自体の年代を示すものではないことを付け加えておく。

PL.13　3トレンチ北側拡張部遺構検出状況（北から）

PL.14　3トレンチ北側拡張部遺構検出状況（東から）

PL.15　3トレンチ南側遺構検出状況（北東から）

PL.16　3トレンチ北側遺構検出状況（南東から）

（4）4トレンチ（Fig.11・Fig.12）

4トレンチは指定範囲中央部に設定したトレンチで、現地表面の標高は26.3～25.6m前後、調査面積は148.36㎡を測る。トレンチ中央部東側では北東方向へ延びる「旧谷部」を検出した。遺構検出面の標高は「旧谷部」西側で24.4m～24.0m前後で東側に向かって傾斜する。東側では24.3m前後の平坦面上で遺構を検出した。トレンチ南端部では第8次調査時の確認トレンチを検出した。検出した遺構は、円形住居・柱穴・土坑（不定形・楕円形など）・旧谷部などがある。

「旧谷部」の両肩部は圃場整備以前の水田造成により大きく改変されていた（Fig.12参照）。谷内部南側には圃場整備時に埋められた「旧竜谷川」が確認される。大型の礫や廃材などで埋められており現在も流水が著しく、トレンチ壁面崩壊の恐れがあったため、谷内部の掘り下げは行っていない。谷西側は圃場整備以前の水田開墾・整備のため大きく改変されており、A・Bの範囲については遺構面は削平されていた。特にAの範囲については河川氾濫によって更に一段深く削平を受けた可能性が考えられる。谷両岸の遺構検出状況より本来は破線Cで図示した付近まで遺構面は存在していたものと考えられる。この谷地形周辺は一段削って平坦面を設け、小区画水田が営まれていたと報告されており土層観察結果と合致する。実際に旧竜谷川が流れていた範囲は幅10m前後で、この範囲については河川作用により深く開析されている。圃場整備以前は竜谷川は谷の東側を流れており、東岸部は人頭大の礫を用いて石垣を設け補強を行っていた。石垣裏には砂礫・シルト層が堆積しているが、これらの堆積層は川岸の補強のための人為的なものである。谷の東岸部では肩際付近まで柱穴・溝などの遺構が存在するが、土層断面では柱穴が掘り込まれている堆積層（暗黄褐色シルト層）は柱穴西側より東側に向かって一段下がり続いている状況が観察される。その先は近代以降の谷の改修・補修などにより失われているため判然としないが、弥生・古墳時代には既に河川に伴う浅い窪みとして谷地形の原形は存在していたと推測できる。谷西岸部については前述の通り、水田整備・河川氾濫によって遺構面の多くが削平を受けている状況である。トレンチ西側の一部ではシルト層～砂礫層面で土坑・柱穴等の遺構が集中して検出されるが、西端部では密度は薄くなる。西端部についても水田開墾により一部が削平を受けているのであろう。

トレンチ東側では褐色シルト層を主体とする遺構面上で円形住居・土坑・柱穴等の遺構を確認した。円形住居は8次調査の確認トレンチで一部を欠くが直径8m前後の規模と推定され、検出面から床面までは30cm以上を測る。このような大型円形住居は5次調査等でも検出されており、周辺に直径8m前後の大型円形住居と6m前後の円形住居によって構成される小単位の生活集団が復元できる。

遺物は弥生土器・土師器・須恵器・近世陶磁器・黒曜石等がコンテナケース1箱分出土した。いず

PL.17　4トレンチ西側遺構検出状況（西から）

PL.18　4トレンチ内「旧谷部土層断面」（北から）

れの遺物も精査時の出土であり、遺構からの出土遺物はない。出土遺物をFig.10に示した。
48は弥生土器甕底部片である。49は土師器甕把手である。把手は断面形が扁平で胴部に差し込み接合される。50は弥生土器甕口縁部片である。51は弥生土器脚部片である。52は須恵器壺口縁部片である。53は縄文時代後期の黒曜石製の「つまみ形石器」で剥片鏃の素材残部である。この他にも弥生時代前期と考えられる黒曜石剥片・破片等が数点出土している。

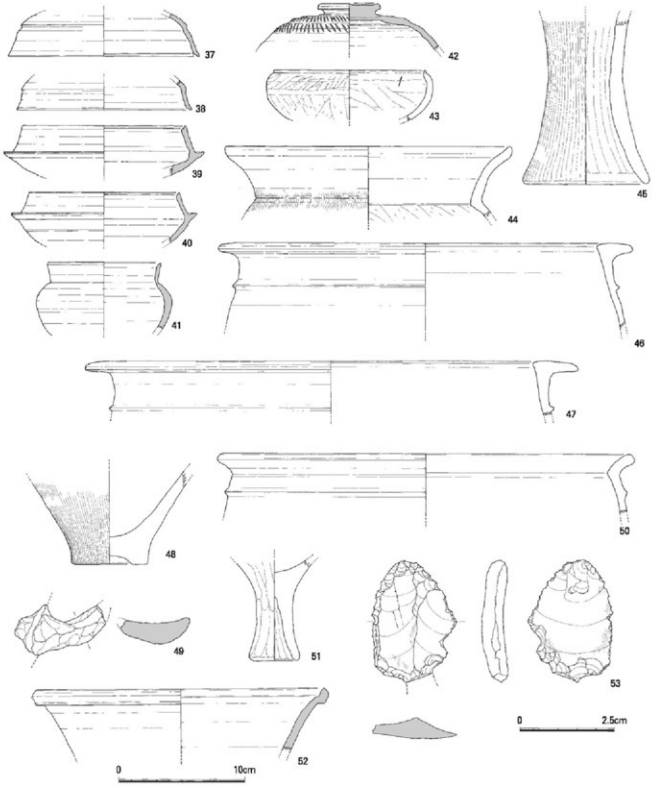
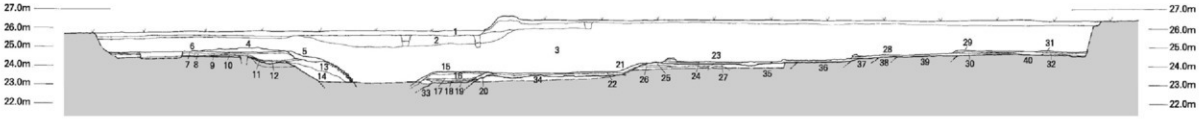
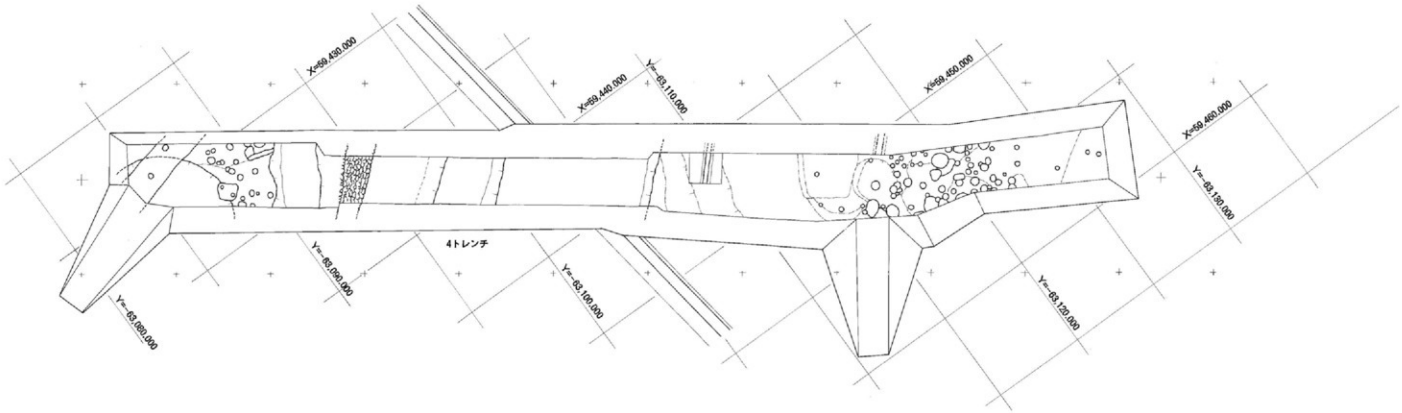
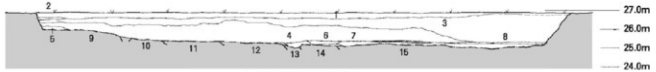


Fig.10　トレンチ3・4出土遺物（53は1/1、37～52は1/3）

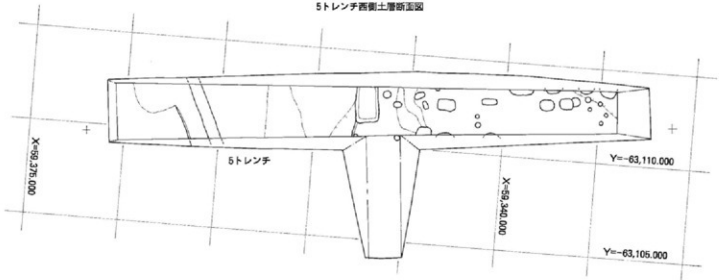


4トレンチ南西側土層断面図





5トレンチ西側土層断面図



4トレンチ南西側土層断面注記

1．現耕作土
2．盛土層（暗渠敷設時の工事層）
3．盛土層（バイラン土）
4．黒色砂礫層（旧表土）
5．黒色土（圃場整備以前の土手改修土）
6．暗青灰色シルト
7．暗黄褐色土
8．暗褐色砂礫層
9．黒灰色シルト層
10．暗黄褐色シルト層
11．暗褐色シルト層
（遺構面直上の層位で谷側に落ちる）
12．黄褐色砂礫層
13．青灰色シルト砂礫層（石垣裏込め）
14．暗褐色シルト砂礫層（谷地形の埋土）
15．黒色土（旧水田耕作土）
16．暗青灰色粘質土（旧水田床土）
17．青灰色シルト土層
18．暗青灰色シルト層
19．黒灰色シルト層
20．青灰色シルト土層
21．黒色土（旧地表土）
22．暗黄褐色シルト層＋砂礫
23．暗黄青灰色シルト砂礫層
24．暗黄褐色シルト層
25．暗青灰色シルト層
26．暗黄褐色シルト砂礫層
27．黄褐色シルト層
28．青灰色シルト層
29．青灰色シルト土層
30．暗黄青灰色シルト層
31．暗灰褐色シルト層
32．暗青灰色砂礫層
以下は屈状地形堆積層の基盤層となる
33．灰色シルト砂礫層
34．青灰色砂礫層
35．青灰色シルト砂礫層
36．暗青灰色砂礫層
37．黒灰色砂礫層
38．暗青灰色シルト層
39．黒灰色シルト層
40．暗青灰色砂礫層

5トレンチ西側土層断面注記

1．現耕作土
2．暗青灰色シルト層
3．暗褐色砂礫層
4．盛土層
5．淡青灰色粘質土
6．青灰色シルト土層
7．黒灰色シルト土層
8．黄褐色粘質土＋砂礫
9．暗褐色砂礫層
10．暗黄青灰色砂礫層
11．暗青灰色シルト層
12．明青灰色砂礫層
13．黒褐色シルト層
14．褐色シルト層
15．黒灰色シルト＋砂礫層

Fig.11　各トレンチ遺構配置図・土層断面図２（１/200）

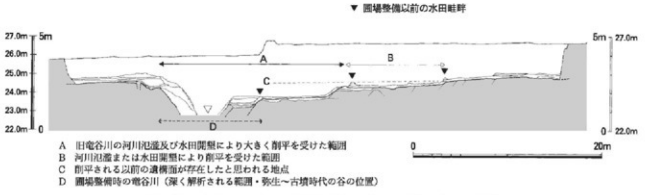


Fig.12　4トレンチ土層断面模式図（縦1/200，横1/400）

PL.19　4トレンチ旧谷部東側土層断面（北から）

PL.20　4トレンチ東側遺構検出状況（東から）

（5）5トレンチ（Fig.11）

5トレンチは史跡指定地内の南西側に位置し、現地表面の標高は26.6m前後、調査面積は68.64㎡を測る。遺構検出面の標高は25.8m～24.9mを測り、北側に緩やかに傾斜している。トレンチ内南側は圃場整備以前の開墾などにより大きく削平されており、遺構は確認できない。中央部から北側で、包含層と遺構を検出した。遺構面は暗褐色土が主体となり、北側端部で青灰色砂礫層へと変わる。

検出された遺構は柱穴・土坑（円形・楕円形など）・溝等である。検出された土坑は磁北の主軸を採るものが多く、直線的に並んで検出された。トレンチ北端部で旧谷部の一部が検出されると予想されていたが、今回の確認調査では検出されておらず、推定位置よりも西側方向へ振れることが判明した。トレンチ南側では圃場整備以前の道路とこれに伴う用水路の痕跡が確認された。
遺物はいずれも細片資料であり、弥生土器・土師器・須恵器片等が出土している。

PL.21　5トレンチ北側遺構検出状況（南東から）

PL.22　5トレンチ全景（北から）

5．小結

各トレンチはいずれも調査目的が設定されており、これらに対して調査で得られた成果を簡単にまとめてみると以下のようになる。

（1）1～3トレンチ

史跡指定地内の北東部は主に古墳時代中期と後期の集落が展開しており、これらの遺構群によって弥生時代の生活遺構についてはその多くが失われていると判断される。しかしながら古墳時代以降の遺構群については良好に遺存していることが確認された。北東部には古墳時代以前の自然流路が形成されていることが確認できたことは成果として挙げられるが、調査目的の一つであった大石地区からの北東方向に延伸してくる「甕棺ロード」は今回の調査区内では明確には確認できず、現在把握されている範囲内で収束するものと判断される。

（2）4トレンチ

主目的であった「谷地形」の形成年代の確認はできなかったが、遺跡内中央部を横断する谷地形は、土層断面の観察や1トレンチの調査成果より弥生時代・古墳時代の段階には規模は異なるものの存在していたと判断される。また、今回の調査成果から「谷地形」は遺跡内を方形に区画する人工的な遺構ではないと判断した。今回の調査範囲・方法では谷の形成年代は確認できなかったが、少なくとも弥生時代・古墳時代には河川として存在しており、遺跡群内の地形を画する一要素として存在していたことが確認できた。

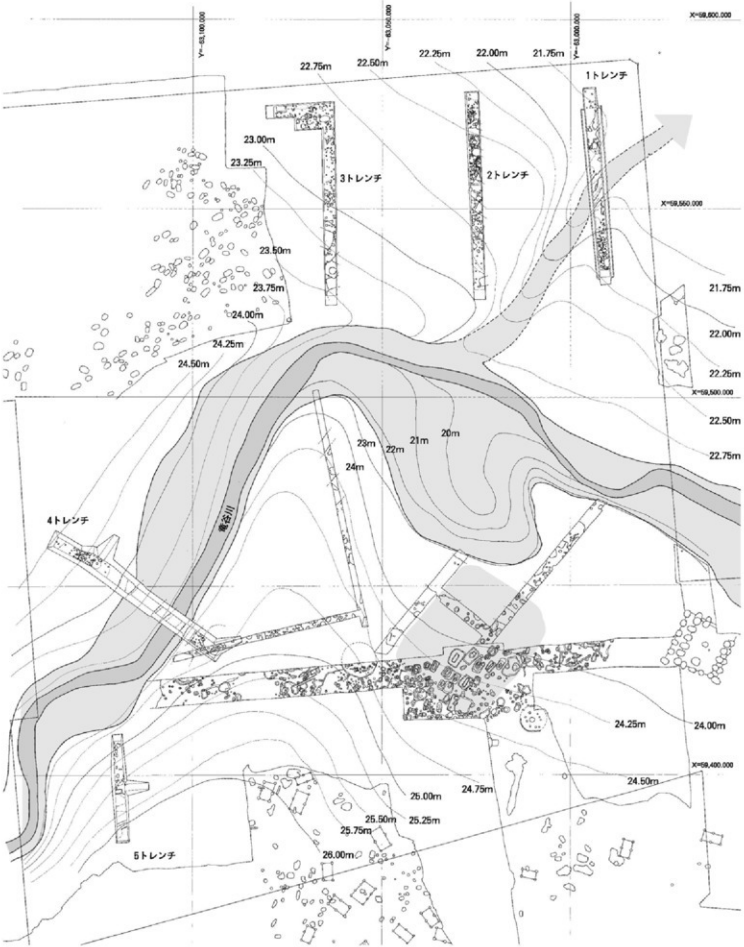
（3）5トレンチ

史跡指定範囲南西部については、水田開墾に伴う段造成が影響を及ぼしていない範囲については遺構群は良好に遺存していることが確認された。5トレンチ南側は旧農道が存在していた箇所であり、この農道沿い北側の帯状の範囲は段造成に伴い大きく削平されているものと予想される。

今回の第17次調査は史跡指定地内未調査範囲の遺構分布状況把握および地形復元のための確認調査である。各トレンチでの平面的な遺構検出・プラン確認に重点を置いたため遺構自体は掘り下げておらず遺構の時期は確定できていない。しかしながら、検出した遺構と精査時に出土した遺物から1～3トレンチ付近には5世紀代と6世紀代の二時期に分けられる集落・遺構群が展開すると考えられ、史跡範囲北東部については弥生時代の生活遺構は古墳時代の集落によって大部分が失われていると考えられる。1・4トレンチでの成果からは遺跡内を横断する河川・谷地形は弥生時代前後より既に存在していたものと考えられる。今回の成果では、この地形を画する「谷地形」には人為的な造営の痕

PL.23　国指定史跡吉武高木遺跡(西・飯盛山山頂から)

PL.24　遺跡内より飯盛山を望む（東から）

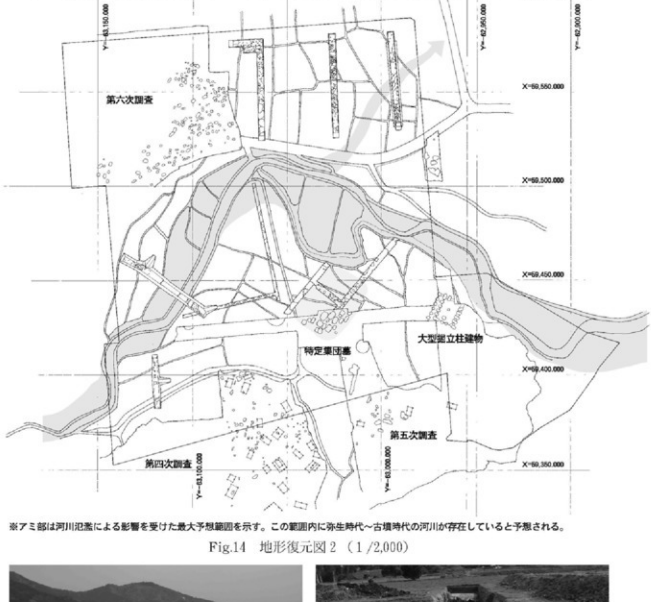


※薄アミ部は河川氾濫による影響を受けた可能性のある範囲を示し、濃アミ部は圃場整備時の竜谷川の位置を示している。等高線は本調査および各調査成果より作成したもの。
1・2トレンチ間を識筋が北東方向に抜けていく状況が等高線より把握できる。

Fig.13　地形復元図1（1/1,000）

跡は認められないが、「特定集団墓」や「大型掘立柱建物」等を集落内の生活領域と画する一要素として大きく利用されたものと考えられる。

今回の調査は遺構分布状況の確認を主目的としたため、表面的な検出に留まるものであり各時代毎の遺構分布状況の把握や空間利用の検討については不十分なものとなってしまった。当初の調査目的を十分に果たしたとは言い難く、不明確な点が多く残った。今後の史跡整備段階での課題としたい。



※アミ部は河川氾濫による影響を受けた最大予想範囲を示す。この範囲内に弥生時代～古墳時代の河川が存在していると予想される。

Fig.14　地形復元図２（１/2,000）

PL.25　４トレンチ遺構面埋め戻し状況(東から)

PL.26　５トレンチ保護層工事状況(北から)

第３章　第18次調査報告

１．調査経緯と組織

18次調査の目的

平成16年度の確認調査は、吉武遺跡群高木地区(以下吉武高木遺跡と呼ぶ)周辺で計画された。主たる目的は、吉武高木遺跡「王墓」に墳丘、もしくは区画を示す施設があるかどうかの確認である。吉武高木遺跡の発見以来、多くの研究者が王墓の区画を想定し、またその形状も円形、長方形さまざまに論ぜられてきた。いわば、この論争に決着をつけるべく計画された調査ということができよう。しかし、結論としては、墳丘、区画とも、これを直接的に示す痕跡は発見することができなかった。その結果について、次項以下で述べることとする。

調査体制

本年度も昨年度の17次調査に引き続き、調査は埋蔵文化財課が担当した。

(発掘調査)

調査主体：(発掘調査) 福岡市教育委員会文化財整備課　課長　榎本芳治
　　同整備係長　橋山邦継　同整備係　榎本義嗣
　　(整理報告) 福岡市教育委員会文化財整備課　課長　橋山邦継
調査総括：(発掘調査) 福岡市教育委員会埋蔵文化財課　課長　山口譲治
　　同調査第１係長　田中寿夫
　　(整理報告) 福岡市教育委員会埋蔵文化財第１課　課長　山口譲治
　　同調査係長　米倉秀紀

発掘調査・整理報告担当：埋蔵文化財課調査第１係　宮井善朗

なお、発掘作業員は、宮井が併行して担当していた金武地区圃場整備に係る発掘調査現場より参加していただいた。

２．調査の記録

概　要

発掘調査の経過を、日誌を元に略述しておく。調査は平成17年１月26日から開始した。まず圃場整備事業による盛り土を重機で除去し、吉武遺跡群第８次調査時の検出面を露出させた。この後８次調査のトレンチを再検出し、手作業で埋め土を除去した。トレンチは壁を清掃し、８次調査時の土層記録と照合した。次に甕棺の位置を確認し、これを壊さないように新たにトレンチを設定し、改めて土層観察を行った。２月17～18日には指導委員会が開かれ、この時点までの成果を報告した。指導委員会後にはトレンチを拡幅し、遺構検出を行ったところ、大形の長方形土坑を検出した。これらの遺構は確認調査という性格上掘り下げは行わず、検出時の状態で写真撮影、平板による遺構配置図作成を行った。記録作業の終了後、３月９日に埋め戻しを完了し、今年度の確認調査を終了した。

調査区の設定（Fig.15）

調査区は、吉武高木遺跡「王墓」の構造、形状を確認するという今年度の調査目的に沿うよう、あらかじめ文化財整備課で策定されていた計画に従って設定した。地点は高木「王墓」の中心部に北接した区域である。この地点では昭和60年度に８次調査が行われている。この調査は高木「王墓」の範

囲確認のため行われたトレンチ調査で、ある程度墓群の北東限および北西限がおさえられていた。この成果を参考に、8次調査トレンチ3を西限とする直角二等辺三角形状の調査区を設定した。

トレンチ配置（Fig.15）

18次調査のトレンチは、8次調査の際に設定されたトレンチ1～3に基づいて、これを補完するのに最も適した位置を考慮して設定した。すなわち、8次調査トレンチ1から北西側4mのところに、トレンチ1に平行にトレンチ4を設定した。トレンチ番号は8次からの継続とした。当初は更に西側へ平行するトレンチをあけていく予定であったが、時間的な問題や調査方針の検討から、トレンチはこれ1本とした。ただし、トレンチ1とトレンチ4の間の部分については、高木3号木棺墓のすぐ北側に当たる箇所でもあることから、土層観察用のベルトを残して拡張し、遺構検出を行った。なお、トレンチ4とトレンチ3の間の部分は、翌17年度に調査が行われた。

検出遺構（Fig.15）

8次調査で検出されていた遺構のほかに、甕棺墓、木棺墓などが新たに検出された。

甕棺墓は9基検出された。このうち棺を確認したもの6基、掘方のみ確認し、甕棺墓と推定したもの3基である。また1基はトレンチ外で検出した。すなわち造成土直下で検出面が現れている部分があるわけで、土層の観察とあわせ、墳丘の残存を否定する根拠となった。確認調査の性格上、完掘したものはないが、甕棺の型式は6次、8次調査と同様であろう。新たに検出した甕棺墓ではないが、8次調査で検出された甕棺墓を1基（K－140）再発掘した。しかし埋納状況を露出したところでとどめた。また上記以外にトレンチ4とトレンチ1の中間部分の南端で、調査区を拡張し遺構検出を行ったところ、2.5m×3.5mの規模の長方形掘方を検出した。主軸は東西方向で他の大形墓とは直交する。木棺墓もしくは甕棺墓と考えられるが、位置的には「王墓」域の中心に近く、また主軸を異にすることから、最初に造営された墓の可能性が考えられる。

出土遺物

出土遺物はコンテナケース3箱ほど出土したが、ほとんどトレンチ埋め戻し土からの出土である。弥生時代中期中葉～後半の土器を中心としており、8次調査の所見から見ても2層出土遺物を中心とするものと考えられる。前記のような出土状況であるため今回は図示していない。なお、2層掘削時に2箇所ほど土器が集中する部分を確認した。これも同様に弥生時代中期中葉～末に属する土器である。これらは取り上げを行わず、養生を施して埋め戻した。

層序（Fig.16）

基本層序は大きく4層に大別される。1層は表土、2層は包含層、3，4層は地山である。各層は更に細分することができる。トレンチ4の土層所見をもとに、各層について述べる。トレンチ1土層も基本的には同じであるが、1層の細分層の同定が一部できなかった。遺跡に関する層序の解釈には影響しないと考える。

1層は表土、旧耕作土関連の土層である。畦畔造成土などもこれに含まれ、1a～1f層に細別される。おおむね、耕作土は暗灰色の粘質土、床土は灰褐色系の粘質土、畦畔は黄褐色系の粘質土からなっている。

2層は北半部のみに部分的に見られる層で、5～10cmときわめて薄い層である。礫を多く含む暗褐

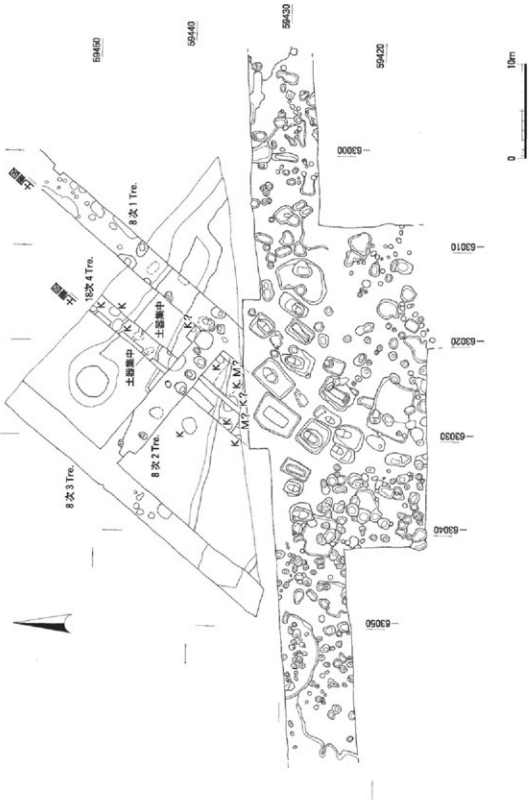


Fig.15　調査区全体図（1/400）

色の粘質土からなり、甕棺の検出面である3層の上をおおっている。土層内には弥生時代中期中葉から後半の土器をわずかながら包含しており、8次調査の所見と合わせ、甕棺墓群を覆う包含層と考えられる。

3層以下は地山である。3層上面で甕棺墓が検出される。2層が堆積する範囲を除いて、1層の表土、耕作土直下で検出される。3a～3fの6層に細分されるが、大きくは3a層を代表とする黒褐色粘質土と、3e層を代表とする暗青灰色砂質土に分けられる。3e層は、トレンチ北側に、3a層はトレンチ南側に見られる。なおこのほかの3層各層について略述すると、

3b層：色調や土質は3a層と区別できない。トレンチ南端部で3a層の深掘り中に甕棺を検出したもので、甕棺の掘り方埋土を含んだ層である。

3c層：3e層がやや黄みを帯びた層である。3e層の上部に鉄分が沈着したものか。

3d層：土質は3e層に類似した砂質土で、色調がやや淡い。

3f層：3d層の上部に部分的に見られる暗青灰色土層で、礫を多く含む。遺構の覆土の可能性がある。

4層は地山の下層で、3層の下部に堆積する砂礫層である。

3．小結

以上、18次調査について報告して来た。小規模な調査であるが、重要な成果を得た調査ということができよう。特に「王墓」の中央部分で大形の掘方を検出したことは注目される。この掘方は3号木棺墓や117号甕棺墓に匹敵する規模を持ち、またこれらに直交する点が興味深い。これについては未掘のため、今後の課題とし、ここでは今回確認した吉武高木「王墓」の上層に堆積した土層の状況から、明らかになった点をまとめておく。

3層の弥生時代前期末～中期初頭遺構検出面の上部には、圃場整備以前の水田に関連する1層と弥生時代中期土器を包含する2層以外に堆積している土層は確認できない。これらの層はいずれも甕棺墓や木棺墓の時期からは後出する層である。したがって、吉武高木の「王墓」には、現況の土層堆積状況で見る限り、墳丘は確認できない。では本来墳丘がなかったのであろうか。これについては不明といわざるを得ない。「王墓」は検出面の甕棺の遺存状況から見て、後世に削平を受けていることが明らかであるからである。問題はその削平の時期であるが、2層の解釈が問題になる。2層に包含される遺物が示す弥生時代中期中葉以降の時期は吉武樋渡「王墓」の形成時期を前後する。吉武遺跡群の弥生中期集落を形成した集団が高木「王墓」を破壊、削平したとすれば、集落・社会集団の発展を考える上で重要な問題を提起することになるだろう。ただし、確実にこの時期に削平されたとはいいきれない面もある。2層の堆積状況は、1層の状況と極めてよく似ており、田面と水平に薄く堆積している。したがって、水田造成時に周辺の弥生時代遺構を破壊した可能性も否定できない。その時期は不明であるが、6次調査区、9次調査区で検出された古代の官衙、鍛冶工房が廃絶した11世紀をさかのぼることはないと考えられる。

これらの点をふまえ、墳丘の確認について今後考えられる方法をあげると、

1．甕棺墓掘り方の底面レベル、甕棺墓の規模等の検討による掘り込み面レベルの推定

2．未掘箇所の確認調査による区画施設の有無の確認。

3．2層の分布範囲、旧地形との相関、層中の包含遺物の詳細等の検討による形成時期の確認。

などがあろうか。史跡地内という制限はあるが、課題とすべきであろう。

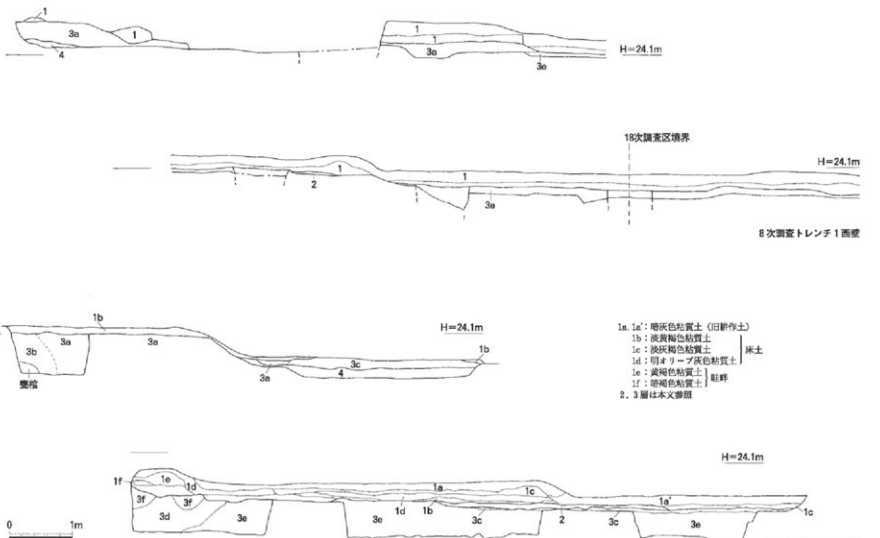


Fig.18 18次調査基本土層図（1/60）

PL.27　調査区全景（西から）

PL.28　調査区全景（南から）

PL.29　トレンチ土層 1（東から）

PL.30　トレンチ土層 2（東から）

PL.31　K140甕棺墓（北から）

PL.32　大形土坑検出状況（南から）

第４章　第19次調査報告

１．調査の目的及び調査経過

吉武遺跡群第19次調査は、３ヵ年で計画された、史跡「吉武高木遺跡」整備に伴う確認調査の最終年度に当たる。今回の一連の確認調査は史跡「吉武高木遺跡」環境整備事業実施にあたり、未調査区の遺構分布状況や旧地形の把握を進め、整備計画の立案に資する目的で行われたものである。

これまでの調査を受けて、平成17年２月に開催された吉武高木遺跡整備指導委員会において、①高木地区大型建物及びそれに付随する関連遺構の精査、②特定集団墓と呼ばれる高木地区埋葬遺構群の範囲確認及び墳丘の有無についての再度の確認、以上２点の調査が必要であるとの指導がなされた。このため、平成17年６月10日付、福市教文第154号により、文化庁長官宛に現状変更許可申請書を提出した。調査方法については、①については建物主軸方向に北西側と南西側の２方向にトレンチを設定し、遺構確認を行う。また、②については既往の８・18次調査トレンチを補完し、土層確認用のベルトを残して、平面的な遺構確認を行うこととした。なお、遺構の掘り下げ、調査区の拡大等の調査方法については文化庁・指導委員会の指導を仰ぐこととした。この後、本申請を受けて平成17年７月15日付け、17委庁財第４の508号で許可がなされた。

調査は埋葬遺構群の平面確認調査から行うこととした（１区）。本地点では前年度に第18次調査が行われており、調査終了後に真砂土による埋め戻しが行われていた。調査はまず重機及び人力による表土・真砂土の除去から行うこととした。その後西側及び東側に調査範囲を拡張するとともに、北側のトレンチを延長した。また大型建物に関連する調査としては、北西部分についてはトレンチを設定した後、平面的な遺構確認を目的として調査範囲の拡大を行った（２区）。南西部分は建物主軸方向にトレンチを設定した。（３区）。その後、文化庁調査官、および平成17年８月８日に行われた第６回吉武高木遺跡整備指導委員会による現地指導を受けた。この結果１区については、特定集団墓と呼ばれる埋葬遺構群については遺構面の削平が進んでいるため墳丘の有無は確認できないことが追認された。また特定集団墓を構成する可能性の考えられる２基の甕棺墓（K140、K153）について掘り下げを行うこととした。さらに２区については一部掘り下げを行い、明確な遺構の確認を行うことし、３区については平面確認を目的とした調査区の拡張を行うこととした。その後調査区の拡張・遺構の平面確認・遺構の掘り下げ等を行い、図面・写真等の記録作成を行った。また、古環境の復元を目的とした花粉・植物珪酸体等の分析を行った。

以上を終了後、遺構面を真砂土で覆い、全体の埋め戻しを行って調査を完了した。調査期間は平成17年７月19日～平成17年９月22日で、調査面積は970㎡、出土遺物は総量でコンテナ15箱である。

２．調査体制（平成17年度）

調査主体	福岡市教育委員会	
調査総括	教育委員会文化財部長	山崎純男
	文化財部文化財整備課長	横山邦継
	文化財部文化財整備課整備係長	田中壽夫
調査担当	文化財部文化財整備課整備係	長家　伸

なお、夏季猛暑の中、現場作業に従事された作業員の方々には、心からの謝意を表したい。

3．調査内容

（1）調査概要

調査は「特定集団墓」と呼ばれ、多くの副葬品が出土した埋葬遺構群に隣接する部分（1区）から行った。当該地点では前年度に18次調査が行われており、その際、調査の大きな目的であった特定集団墓の中心墓域における墳丘の有無については、削平の進んでいる現状では確認できないことが明らかとなっている。また、6次調査において多数の遺物が出土した2号木棺墓の北側に2.5m×3.5mの大型の掘り方を確認した。更にその北側に大型の金海式甕棺（8次調査のK140）を検出し、掘り方の一部掘り下げを行った。18次調査では以上の調査を終え、真砂土による埋め戻しを行っている。今回の調査は真砂土の除去・清掃を行った後、これらの既調査地点を基準として、土層確認ベルトを残しながら、調査区の拡張を行った。1区は前述のように、現状では道路下に埋め戻し保存されている6次調査検出の特定集団墓域の北側にあたり、これに伴う確認調査（8次調査）地点を再度精査している。調査区は、18次調査トレンチ4及びこの西側に拡張した部分を1－1区、18次調査トレンチ1の

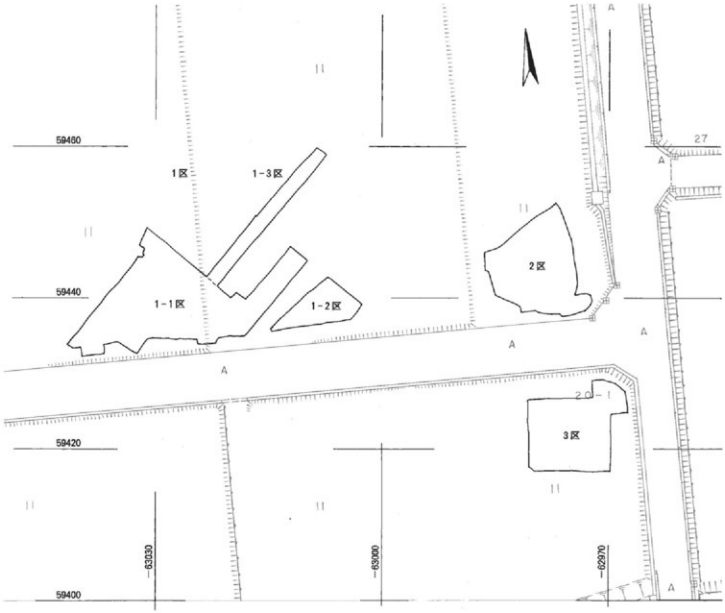


Fig.17　調査地点位置図（1/500）

東側に広げた調査区を1－2区、トレンチ4の北側に延伸した部分を1－3区としている。

1区では、特定集団墓にかかる墳丘の有無について再度精査を行ったが、墳丘は確認できなかった。また遺構検出の結果、6次調査K101の北側に、軸をそろえた隅丸長方形の掘り方（K153）が確認できた。この掘り方は東側に同様の主軸を取る掘り方（K166）と並び、これを境として西側には生活遺構が広がっているため、この墓坑が特定集団墓の区画縁辺に当たる可能性が考えられた。この成果をもとに文化庁及び吉武高木遺跡整備指導委員会の現地指導を受けた結果、特定集団墓の区画範囲確定のために、K153及び大型甕棺墓であるK140を掘り下げ、甕棺の取り上げを行うこととした。精査の結果、K153墓坑には甕棺が埋葬されていたが、K140・K153ともに棺内から青銅器・装身具等の副葬品は出土しなかった。なお、K153については甕棺・副葬土器の取り上げを行った後に墓坑を完掘したが、K140については棺内を掘り上げた後、破損していた口縁部破片と標石を取り上げたほかは、甕棺本体も現地で埋め戻している。

大型建物関連調査区については、大型建物（6次調査 SB02）の北西側を2区、南西側を3区として調査区を設定した。2区においては、大型建物に並列する大型方形竪穴住居跡の一部掘り下げを行うとともに、大型建物関連遺構の確認に努めたが、本調査区内では関連遺構は認められなかった。また3区では遺構の上面確認にとどめたが、2区同様に関連遺構は認められなかった。なお、大型建物の時期については、報告当初は弥生時代中期初頭に位置付けられていたが、その後の出土遺物等の検討により中期後半代と改められている。

以上の調査を行った後、調査地点を真砂土で覆い、既存の盛り土を戻して調査を終了した。

（2）1区の調査

概要

1区は特定集団墓の区画範囲確定を行うことを主目的とし、1－1区は6次調査の墓群の北側に設定した。この部分は圃場整備以前の旧耕作土・床土が残されており（Fig.19：A－B、C－D、E－F土層参照）、圃場整備以前の状況が残されている。遺構面は基本的に旧床土直下で認められ、A－B土層より、6次調査に近い1－1区南側では24m前後の褐色～黄褐色シルト層を遺構面としている。また一段下がった北側では、拳大の礫を含んだ暗褐色土を遺構面とし、遺構面標高は23.7m前後である。ともに遺構面は平坦となり、水田開発等による削平が進んでいたものと考えられる。1－1区南側では6次調査の大型墓群と主軸をほぼそろえ、隅丸（長）方形を呈する埋葬遺構と考えられる掘り方平面（K153、K166、K167）を検出した。これらは2基1組を基本とした埋葬状態も看取されるほか、拳大礫を多く含む暗褐色土～砂質土を埋土とし、埋土中には遺物があまり認められないという共通点を有する。これと比較してK153西側には区画溝状のSD01が認められ、更にこの西側には、ピット、土坑等の生活遺構が密集し、甕棺墓はほとんど認められなくなる。なお、生活遺構の埋土も暗褐色土が主体となるが、甕棺等の埋葬遺構の埋土と比べると土器片が多く含まれており、比較的礫が少ないものが多い。以上から区画溝SD01に隣接するK153が特定集団墓の北西端に位置する可能性が考えられた。また北東部においては6次調査で多量の副葬品が出土した2号木棺墓の北側で主軸を直交させる2.5m×3.5mの隅丸方形の掘り方が確認された。埋土は甕棺墓同様に拳大礫を非常に多く含む暗褐色土であり、埋葬遺構の可能性が高いものと考えられる。本遺構は前年18次調査において確認されたもので、木棺墓の可能性が指摘されたが、主体は不明であり今回の遺構番号整理の段階ではK154としている。更にその北西側には掘り方は円形を呈するものの、口径・器高1m程の大型単棺（K140）が8・18次調査において確認されている。

以上の状況を受け、特定集団墓の範囲を確定させるため、K153と、18次調査で一部掘り下げを行ったK140の2基について掘り下げを行うことし、区画溝状のSD01についても部分的に掘り下げることとした。この結果K140・K153共に金海式甕棺を確認したが、2基の甕棺墓には青銅器・装身具等は副葬されていないことが判明した。またSD01は特定集団墓の埋葬時期より下る弥生時代中期後半代に位置付けられ、埋葬域と生活域を区画する溝状遺構と考えられた。これらの調査結果から、弥生時

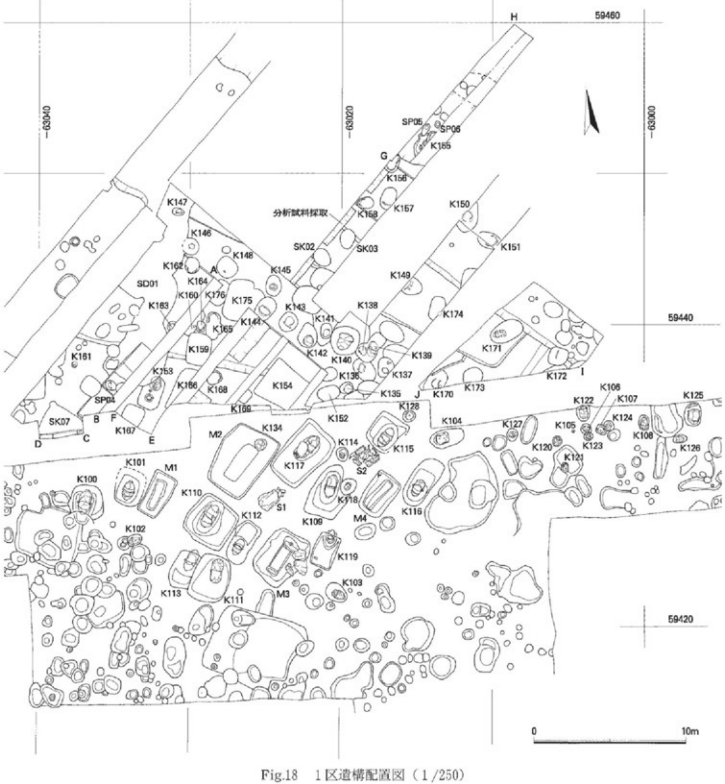


Fig.18　1区遺構配置図（1/250）

PL.33　1区全景（西から）

PL.34　拡張前1区全景（西から）

PL.35　1－2区全景（北東から）

PL.36　1－3区全景（南から）

代前期末～中期初頭に形成された特定集団墓は規格的な墓坑を有する木棺墓・甕棺墓で構成され、形成時には溝等は認められないものの、略方形の区画が意識されたものと考えられ、K153はその区画縁辺に位置するものと考えられる。また、中期後半には区画溝が掘削され、生活域との区分が視覚的にも表現されている。その後、周辺に生活域が広がる古墳時代にかけても区画墓域については生活域に侵食されていないため、標石等何らかの視覚的表現が残され、墓所として認められていたものと考えられる。

なお、1－1区では旧耕作土・床土直下で遺構面が露出しており、18年度調査報告でも報告されているように(第3章参照)、甕棺を覆う墳丘状の土層は観察できず、現時点では墳丘の有無については確認できない。18次調査で問題となった中期中頃以降の暗褐色土包含層についても、SD01の掘削や遺構分布などからも、この時期の特定集団墓削平は考え難く、後世の水田開発に伴うものと考えたい。

1－2区は北東側の甕棺墓域を確認するために設定した。1－1区の下段に対応する上段部分とこれより更に一段低くなる部分がある。上段は標高23.5m前後を測り、下段は23.2m前後である。ここも旧耕作土・床土直下で遺構面の暗（黄）褐色シルト／挙大礫を含む茶褐色砂質土が露出し、圃場整備による削平は行われていないことが確認できた。なお、上段の旧耕作土直下には遺物を多く含む暗褐色土包含層（Fig.19：I－J土層 4層）が形成されているが、この下位にも耕作土・床土（同 5・7層）が認められたため、この包含層は水田面造成に伴う新しい時期の整地土であると判断した。また

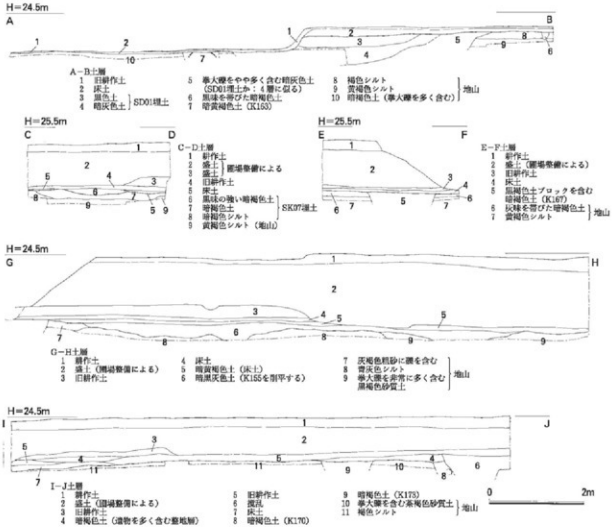


Fig.19　1区調査区内土層図（1/80）

PL.37　A－B土層

PL.38　E－F土層

PL.39　G－H土層

PL.40　I－J土層

次数	調査区	略号	遺構番号	型式				組み合わせ		甕サイズ			埋置角度	埋置角度	時期(型式)	副葬品	備考	報告書集	遺構図Fig	遺物図Fig
				単棺	複棺			上棺	下棺	~59		80~								
					接口	覆口	呑口			S	M	L								
6		K	100			○		甕	甕			○	N-17°-E	26	Ⅱ	銅剣1	区画墓内	461	31	32・33
6		K	101		○			甕	甕		○		N-22°-E	36	Ⅱ		区画墓内	580	34	35
6		K	102		○			壷	甕	○			N-76°-E	3	Ⅲ		区画墓内	580	43	44
6		K	103		○			鉢	甕	○			N-58°-W	16	Ⅲ		区画墓内	580	43	44
6		K	104	○				—	甕			○	N-80°-E	40	Ⅰ	小甕		580	34	35・36
6		K	105					—	壷？				—	—	—			580	43	44
6		K	106	○				—	壷		○		N-16°-E	47	Ⅰ			580	43	44
6		K	107			○		鉢	壷	○			N-67°-W	22	Ⅰ			580	43	44
6		K	108				○	壷	壷	○			N-10°-E	36	Ⅰ			580	43	44
6		K	109		○			甕	甕			○	N-24°-E	20	Ⅱ	管玉10	区画墓内	461	34	35・36
6		K	110			○		甕	甕			○	N-40°-E	28	Ⅱ	銅剣2、翡翠勾玉1、管玉74	区画墓内	461	37・38	39~41
6		K	111			○		甕	甕			○	N-15°-E	19	Ⅱ	管玉92	区画墓内	461	42・43	44・45
6		K	112			○		甕	甕		○		N-32°-E	31	Ⅱ		区画墓内　下甕に鹿の線刻	580	37	38
6		K	113		○			甕	甕			○	N-30°-E	25	Ⅱ		区画墓内	580	37	38
6		K	114			○		壷	壷	○			N-17°-E	36	Ⅱ		区画墓内	580	43	45
6		K	115		○			甕	甕			○	N-44°-E	35	Ⅱ	銅剣1	区画墓内	461	46	47.48
6		K	116			○		甕	甕			○	N-37°-E	45	Ⅱ	銅剣1、小壷	区画墓内	461	49	50~52
6		K	117			○		甕	甕			○	N-51°-E	18	Ⅱ	銅剣1、翡翠勾玉1、管玉42 ガラス小玉1、小壷	区画墓内　標石	461	53・54	55~58
6		K	118			○		鉢	甕	○			N-51°-E	25	Ⅱ		区画墓内	580	43	45
6		K	119			○		壷	壷		○		N-20°-E	17	Ⅱ	小壷	区画墓内	580	39	40・41
6		K	120	○				—	甕	○			N-14°-E	43	Ⅱ			580	43	45
6		K	121	○				—	壷	○			N-14°-E	—	Ⅰ~Ⅱ			580	46	47
6		K	122		○			鉢	甕		○		N-1°-E	46	Ⅱ			580	39	40
6		K	123	○				—	甕	○			N-87°-E	—	Ⅰ~Ⅱ			580	46	47
6		K	124			○		壷	壷	○			N-16°-W	40	Ⅰ~Ⅱ			580	46	47
6		K	125	○				—	甕			○	N-7°-E	38	Ⅰ		磨製石鏃	461	59	60・61
6		K	126		○			壷	壷	○			N-70°-E	25	Ⅰ~Ⅱ			580	46	47
6		K	127			○		鉢	壷	○			N-6°-W	62	Ⅰ~Ⅱ			580	46	47
6		K	128	○				—	鉢	○			N-14°-E	0	—			580	46	—
6		K	129														未掘　580集 PL.19	580	33	
6		K	130														未掘　580集 PL.19	580	33	
6		K	131	○				—	壷				—	—	—	小壷	未掘 区画墓内 M2北側 580集 PL.19	580	33	42
6		K	132														未掘　580集 PL.19	580	33	
6		K	133														未掘 区画墓内 M4壁面で確認 580集 PL.19	461	81	
6		K	134			○		壷	壷	○			N-22°-E	36	Ⅱ		区画墓内　M2墓坑内	580	46	47
8		K	135														未掘			
8		K	136														未掘			
8		K	137														未掘			
8		K	138			○		鉢	甕		○		N-1°-W	—	Ⅱ		未掘	580	48	—
8		K	139														未掘			
8		K	140	○				—	甕			○	N-34°-E	28	Ⅱ	小壷?	19次調査	1061	20	20
8		K	141														未掘			
8		K	142														未掘			
8		K	143														未掘			
8		K	144	○				—	甕			○	N-40°-E	—	Ⅱ		未掘	580	48	—
8		K	145														未掘			
8		K	146														未掘			
8		K	147														未掘			
8		K	148														未掘			
8		K	149														未掘			
8		K	150														未掘			
8		K	151														未掘			
8		K	152														未掘			
19	1−1	K	153			○		壷	甕			○	N-20°-E	44	Ⅱ	小壷	19次調査　区画墓内	1061	21	22
19	1−1	K	154														未掘　区画墓内　木棺墓の可能性もあり			
19	1−3	K	155										N-18°-E				未掘			
19	1−3	K	156										N-26°-E				未掘			
19	1−3	K	157										N-34°-E				未掘			
19	1−3	K	158										N-76°-W				未掘			
19	1−1	K	159														未掘　区画墓内　掘り方隅丸長方形			
19	1−1	K	160														未掘　区画墓内　上面小壷出土			
19	1−1	K	161														未掘　掘り方不明　甕棺？			
19	1−1	K	162										N-25°-E				未掘　小壷破片出土、上甕は壷			
19	1−1	K	163										N-13°-E				未掘　上甕は胴部破片			
19	1−1	K	164										N-28°-E				未掘　区画墓内			
19	1−1	K	165										N-9°-E				未掘　区画墓内			
19	1−1	K	166														未掘　区画墓内　掘り方隅丸長方形			
19	1−1	K	167														未掘　区画墓内　掘り方隅丸長方形			
19	1−1	K	168														未掘　区画墓内			
19	1−1	K	169														未掘　区画墓内			
19	1−2	K	170														未掘　小壷出土			
19	1−2	K	171										N-78°-E				未掘			
19	1−2	K	172										N-65°-W				未掘			
19	1−2	K	173														未掘			
19	1−1	K	174														未掘　8次調査地区内　甕棺崩落			
19	1−1	K	175														未掘　区画墓内　掘り方隅丸長方形			
19	1−1	K	176														未掘　区画墓内　掘り方隅丸長方形			
6		M	1										N-30°-E	—	Ⅱ	銅剣1、管玉20、小壷	区画墓内	461	62・63	64~66
6		M	2										N-44°-E	—	Ⅱ	銅剣1、翡翠勾玉1、管玉133 小壷	区画墓内	461	67・68	69~71
6		M	3										N-36°-E	—	Ⅱ	銅剣2、銅矛1、銅戈1 多鈕細文鏡1、翡翠勾玉1 管玉95、小壷	区画墓内　標石	461	72・73	74~78
6		M	4										N-46°-E	—	Ⅱ	銅剣1、小壷	区画墓内　標石	461	81	82・83
6		S	1														区画墓内			
6		S	2														区画墓内			

本表は『吉武遺跡群』XX　総集編　福岡市埋蔵文化財調査報告書第1018集　所収の表を元に加筆し一部を改変したものである。
時期については、弥生時代前期前半~前期後半（伯玄式）をⅠ期、弥生時代前期末（金海式）~中期中頃（汲田式）をⅡ期、中期中頃（須玖式）~中期末（立岩式新段階）をⅢ期としている。
遺構の略号は甕棺：K、木棺墓：M、標石：Sとする

Tab.2　史跡地内高木地区検出甕棺・木棺墓一覧表

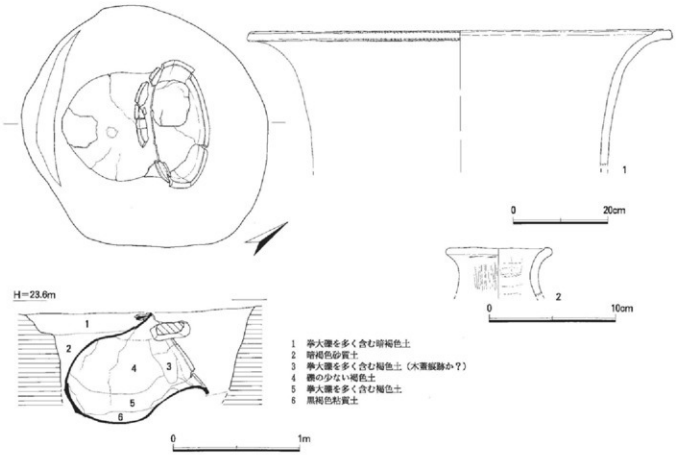


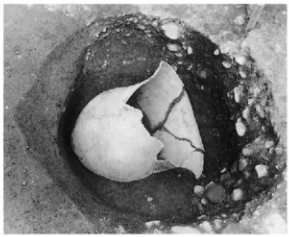
Fig.20　K140及び出土遺物実測図（1/30、2は1/3、1は1/8）

遺構面上段では拳大礫を含む暗褐色土を埋土とした甕棺墓を4基確認しているが、下段では暗褐色土を埋土とした土坑・ピット等の生活遺構が広がっており、埋葬域分布が限られている。

1-3区は18年度調査のトレンチ4を北東側に延長し、北側に想定されている旧河川と、甕棺分布の広がりを確認するために設定した。調査区内では南端が標高23.5m、K157付近は23.1m、北端が22.7m前後である。遺構面は中央付近がグライ化したシルト層となり、更に北側では旧河川によるものと考えられる礫層が露出している（Fig.19：G-H土層）。また甕棺は地山直上の暗黒灰色土によって切られており、K155が北西端となっている。甕棺の残存状態から、暗黒灰色土は地山を削平した直上に形成されており、1-2区で確認した整地土と同様の新しい整地土の可能性が考えられる。

1区では水田化による削平により、遺構面は旧地形を保っておらず、段々に平坦化されている。わずかに残された遺構面の勾配から、北東側旧河川方向と東側の扇状地形末端方向に向けての傾斜が復元できる（第2章 Fig.13参照）。このため特定集団墓における墳丘の有無については不明のままであるが、埋葬遺構の掘り方形状・主軸方向・周辺の生活遺構の分布などから、特定集団墓の区画については18m×20mの略方形区画を復元することができた。また、特定集団墓の北東側周辺に広がる（長）円形掘り方を主体とし、主軸方位に偏差が認められる小型墓群についても、17m×38mの分布範囲を抑えることができた。

また、古環境復元を目的として、K140墓坑埋土（暗褐色砂質土）と比較資料として壁面地山土（青灰色シルト）、K153墓坑埋土（暗褐色シルト）・甕棺内埋土、K154検出面埋土をそれぞれサンプリングした。また1-3区壁面（18次調査地点掘削のトレンチ4に対応）の暗褐色粘質土（Fig.16　2層）と暗青灰色砂質土（Fig.16　3e層）からもサンプリングし、植物珪酸体分析・花粉分析・種実同定等



PL.41　K140棺内完掘後（東から）

PL.42　K140棺内埋土

の自然科学分析を行った。その結果、甕棺埋葬時にはイネ科、ヨモギ属、タンポポ亜科などが生育する日当たりのよい人里の環境であり、周囲では種作が行われていたことが推定され、周辺では照葉樹林が分布していたと想定できる（附編参照）。

遺構と遺物

K140（Fig.20、PL.41・42）

1－1区北側で検出する。昭和60年に行われた、高木地区の確認調査である8次調査ですでに確認されており、平成16年度の18次調査において掘り方の一部掘り下げを行っていた。調査は前年度埋め戻された真砂土除去の後、掘り方埋土の掘り下げを行い、甕棺の露出を行った。墓坑は径2ｍの略円形を呈し、南側上部に幅10cm程度の平坦面を有する。甕棺は金海式の単棺で、内部に長さ40cm、幅30cm、厚さ7cm程度の板状の花崗岩自然石が転落しており、本来標石であったものと考えられる。棺内土層より木蓋の存在が想定でき、木蓋の崩壊によって転落したものであろう。埋葬主軸方位はN－34°－Eにとり、埋置角度は28°である。甕棺は削平により口縁部上端部が破損するほかはほぼ完形を保っており、胴部下半の、掘り方底部に接する部分には焼成後の穿孔が行われていた。なお、復元はできないが小破片に破損した小壷（2）が出土しており、当初副葬されていたものが、その後の削平時に失われた可能性も考えられる。また、掘削した甕棺内埋土は全量採取後水洗を行ったが、副葬品等は認められなかった。甕棺は破損した口縁部及び胴部上半の一部のみを取り上げた。

出土遺物（Fig.20）

1は甕棺の口縁部である。破損した口縁部分のみの取り上げとしたため、口縁部の1／3程度の破片である。ラッパ状に広がる口縁部は復元外径90cmを測り、胴部上半は湾曲しながらほぼ直立する。口縁部上端面には薄く粘土帯を貼付し、上面はわずかに内傾している。また口縁部外面の上下両端部には刻み目を施す。調整は、内面胴部屈曲部以下には指押えの後、横ナデを行う。また口縁部内・外面は横ナデ、外面屈曲部以下は縦方向のナデの痕跡が残る。ナデ調整は全体に丁寧に行われている。胎土には径2～3mmの石英砂粒を多く含み、やや粗めな胎土となる。色調は外面褐色、破面～内面は浅黄色を呈する。2は墓坑埋土中から出土した小壷の口縁部である。口縁部の1／3程度が残存しており、図示したもの以外に同一個体のものと考えられる胴部の小破片が出土している。復元口縁部外径8.4cmを測り、頸部は湾曲し、口縁端部上面は部分的に極わずかな肥厚部を有する。調整は、頸部内面は指押えの後に横方向のナデを行う。また、口縁部内外面は横ナデ、頸部外面は縦方向のナデによる。ナデ調整は非常に丁寧で、器面はミガキ状の光沢を有する。色調は内外面暗褐色を呈し、胎土

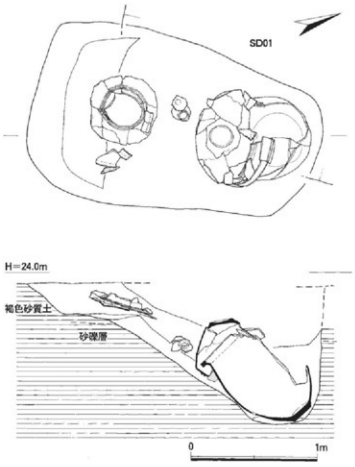


Fig.21　K153実測図（1/30）

は石英微砂粒を含むものの精良である。

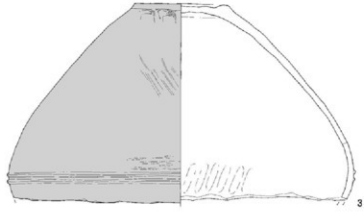
K153（Fig.21、PL.43・44）

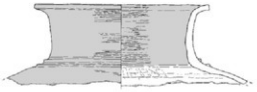
1－1区西側で検出する。掘り方平面は長さ2.3m、幅1.4mの隅丸長方形を呈し、北西側をSD01に切られている。埋葬遺構に共通する埋土を有し、隅丸長方形の掘り方主軸方位が6次調査の特定集団墓に近似していることや、同様の掘り方・埋土を有するK166と並列ペアを為すように配置されていることなどから埋葬遺構であることが推定できた。またK153の西側には区画溝状のSD01が掘削されており、これを境に西側には埋葬遺構は広がっておらず、生活遺構が集中している状況が看取された。以上から、本埋葬遺構が、特定集団墓の一角を構成するとともに、配置上西端に位置する可能性が高いことが想定された。

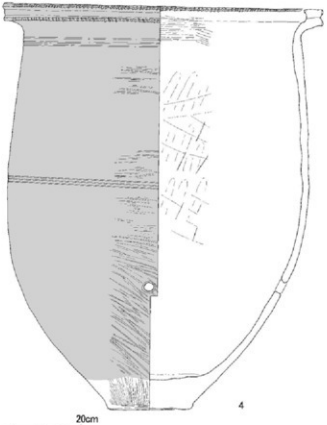
調査は木棺墓の可能性も想定して長短両軸に土層観察用ベルトを残して掘り下げを行い、副葬土器や上甕が確認できた後、甕棺墓として墓坑の掘り下げを行った。掘り方は南側に一段平坦面を有し、そこから更に斜めに掘り下げ、甕棺を埋置している。甕棺墓の主軸はN－20°－Eにとり、埋置角度は44°である。甕棺は上甕には壷の下半部を用い、下甕は金海式の甕で胴部下半に焼成後の穿孔を施している。また上下両甕ともにSD01の掘り方により西側の一部を失っている。上甕と下甕の接合部は覆口式で、埋置状態での掘り方底面側部分にのみ黄褐色粘土による目張りを行っている。

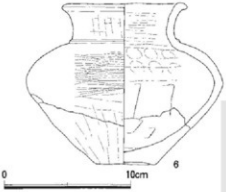
PL.43　K153（北西から）

PL.44　K153墓坑内副葬土器（東から）









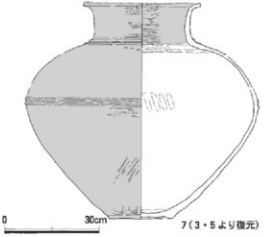


Fig.22　K153出土遺物実測図及び写真（6は1/3、3～5は1/8、7は1/12）

上甕の南側斜面上には小壷が副葬されているが、副葬時に胴部中位で半裁した上で埋置されたものと考えられ、上半部を覆うように下半底部が倒置されていた。また、墓坑内より小壷の接合破片が出土しており、埋納時に壷の半裁行為が行われたことが想定できる。また墓坑南の平坦面側では、大型の壷口縁部～肩部が埋置されていた。肩から上部はほぼ完存しており、副葬小壷同様意図的に半裁されたものと考えられる。形態・残存状況から考えると、接合部分はないものの、上甕に用いられている下半部分と同一個体になるものと考えられ、復元すると肩部粘土帯部分で割りとられている可能性が高い。なお、墓坑内では大型壷割りとり部の接合部位は出土していない。このように、割られた土器の副葬については埋葬に関わる特別な意図を想定することも可能と考えられるが、推測の域を出ておらず、今後の検討課題としたい。また、K140同様に掘削した甕棺内埋土は全量採取後水洗を行ったが、副葬品等は認められなかった。なお、本甕棺墓については甕棺・副葬壷を取り上げ、墓坑の完掘を行っている。

出土遺物（Fig.22）

3は上甕に用いられた大型壷の下半部分である。胴部最大径位置に2条の三角突帯を貼付し、その上部の粘土帯接合部分で割り取っている。内面は器面の剥落が進んでいるが、ナデによる調整が認められ、上端部分には指ナデの痕跡が残っている。また外面は上半部が横方向のミガキ、下半部には縦～斜方向のミガキが行われており、底部付近にはヘラ状工具によるナデの痕跡が残っており、一部には刷毛目が残る。また大半が剥落しているものの、痕跡から、外面全面に黒色顔料が塗布されていたものと考えられる。胎土には1～3mm程度の石英砂粒を多く含み、色調は内面橙色、外面にぶい橙色を呈する。4は下甕である。口縁部外径67.9cm、器高86cmを測る。屈曲した口縁端部上面に厚い粘土帯を貼付し肥厚させる。口縁上面端部はほぼ平坦で、内側にやや突出している。また、口縁部内面上端及び外面上下両端部の3箇所に刻みが施されている。胴部は口縁下ですぼまり、胴部中央部に向けて緩やかにふくらみを有する。また胴部外面の2箇所に、それぞれ3条の沈線を刻んでいる。胴部下半には焼成後の穿孔が1箇所に行われている。調整は外面底部付近に縦刷毛が残るが、その上部には斜め～横方向のミガキが行われ、上半部にはミガキ後にナデも行われている。器面の剥落が進んでいるが、外面及び口縁部内面には黒色顔料が塗布された痕跡が残っている。内面には口縁下の屈曲部分に横方向の刷毛目が残るが、これ以下には指ナデ、ヘラ状工具によるナデが行われており、工具の小口痕も認められる。胎土は比較的精良だが、径1～2mmの石英砂粒を多く含む。色調は内外面浅黄橙色を呈し、胴部外面に1箇所黒斑が認められる。5は墓坑内に据えられていた大型壷の口縁部である。頸部はほぼ直立し、外反する口縁部は端部を断面コ字状に整形している。また外面屈曲部位には2条の三角突帯が貼付される。調整は、頸部内外面には横方向のミガキが行われ、外面の一部にはミガキ前の刷毛目が残っている。口縁部は内外面横ナデを行い、胴部内面には指ナデを施している。また痕跡より外面～頸部内面まで黒色顔料が塗布されたものと考えられる。胎土には径1～3mmの石英砂粒を含み、内外面橙色を呈する。また接合部位はないものの出土状況・形態より上甕（3）と本来一個体をなすものと考えられ、復元作図したものが7である。肩部の粘土帯（幅12cm程度）部分で破砕、分割したものと想定でき、本来の器高は68cm程度に復元できる。なお、3・5両個体ともに破面には顔料の痕跡は認められず、元々、顔料まで塗布して製作した1個体を、埋葬にあたり分割したものであろう。6は副葬小壷で、胴部中位で半裁され墓坑内に副葬されていたものである。頸部は湾曲して外側に広がり、口縁端部を嘴状に引き出して整形している。屈曲部には1条の三角突帯を貼付し、腰高で偏球形の胴部をなす。底部はわずかに上げ底とする。胴部調整は外面下半に縦方向に押圧状のナデ、上半に横方向のヘラミガキを行う。内面は最大径以下には工具による横ナデを行い、小

口唇跡を残す。また、上半は指押えの後横ナデを行う。頸部外面は縦方向の強いナデを行った後に横ナデを施し、内面にはヘラ状工具による横方向のナデが行われる。ナデ調整はいずれも丁寧で、器面にミガキ状の光沢を有する。胎土には径1～2mmの石英砂粒を多く含み、色調は内外面ともに褐灰色を呈する。

その他の埋葬遺構（PL.45・46）

今回の調査では、検出面で甕棺が露出していないものについて、埋葬遺構に共通する拳大礫を多く含んだ暗褐色土埋土より埋葬遺構と判断したものも多数あり、そのため、一部には甕棺墓としたものの中でも、K154のように木棺墓の可能性をもつものや、埋葬遺構でないものがある可能性もある。また検出時において甕棺が露出してない遺構の中には、遺構番号をつけていないものがある可能性も考えられる。以上の点を踏まえた上で、今回の調査で新たに確認した甕棺墓は24基存在する。これによって現在までのところ史跡指定地内高木地区で確認された埋葬遺構については、甕棺墓77基（うち45基が未掘）、木棺墓4基、標石2器（未掘）となっている。時期的には弥生時代前期後半～中期後半にわたるが、いわゆる前期末～中期初頭の金海式甕棺が大半を占めている。また、多数の副葬品を有する埋葬遺構は、墓坑の掘り方が主軸をそろえた隅丸長方形を呈し、明確な埋葬区画が想定される「特定集団墓」を形成しているが、その北側に広がる周辺墓群においては、埋葬主体の主軸方位の規則性が薄れ、墓坑掘り方も（長）円形を呈するなど明らかに特定集団墓とは異なる様相を呈している。これらの墓群は南北約17m、東西約38mの範囲に分布することが確認できたが、周辺墓群を含む埋葬遺構群の分布範囲内にはほとんど生活遺構がなく、墓域がきわめて長期間生活域に侵食されなかったことが伺え、標石等の存在により、墓地空間としての認識が残されていたことが想定できる。

その他の遺構と遺物

SD01（Fig.23）

1－1区西側で検出した。南端部分は明瞭に立ち上がり、K153の一部を切って、北側ではクランク状に折れ曲がって延びている。時期の確認を行うため、南端部の一部にトレンチを設定して掘削した。SD01を境として明瞭に墓域と生活域が分離されており、区画溝としての機能を有したものと考えられ、K147は埋没後に埋葬されている。時期的には特定集団墓及び周辺墓群の埋葬がほとんど終了した中期後半の遺構と考えられ、埋葬終了以後に、墓域の区画を意図して掘削されたものと考えられる。トレンチ内ではコンテナ4箱程の土器破片が出土している。

出土遺物（Fig.23・24）

8～15は1層出土である。16・17はK153墓坑出土としていたが、本来SD01内のものが混入したと

PL.45　K170（北から）

PL.46　K164・165（北から）

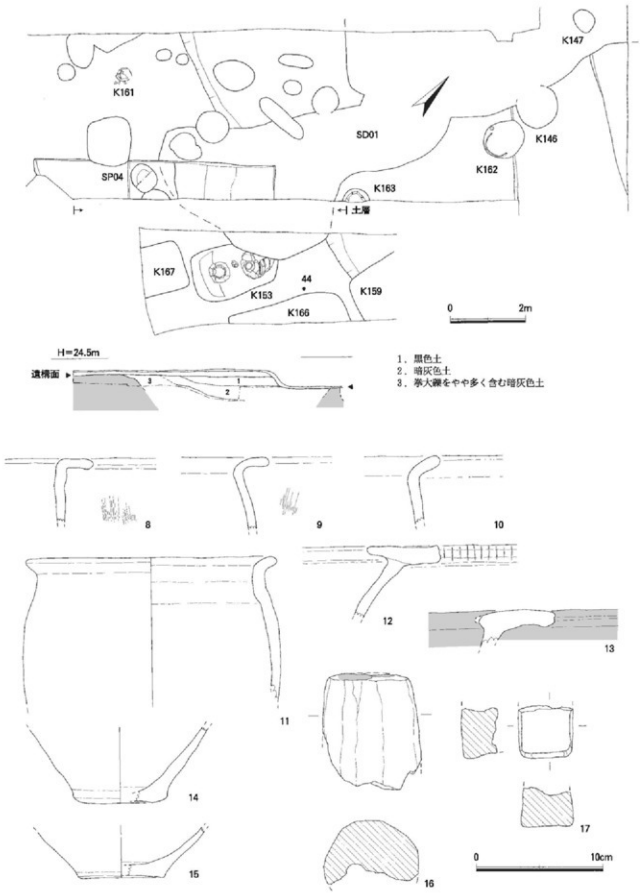


Fig.23　SD01及び１層出土遺物実測図（１/100、１/３）

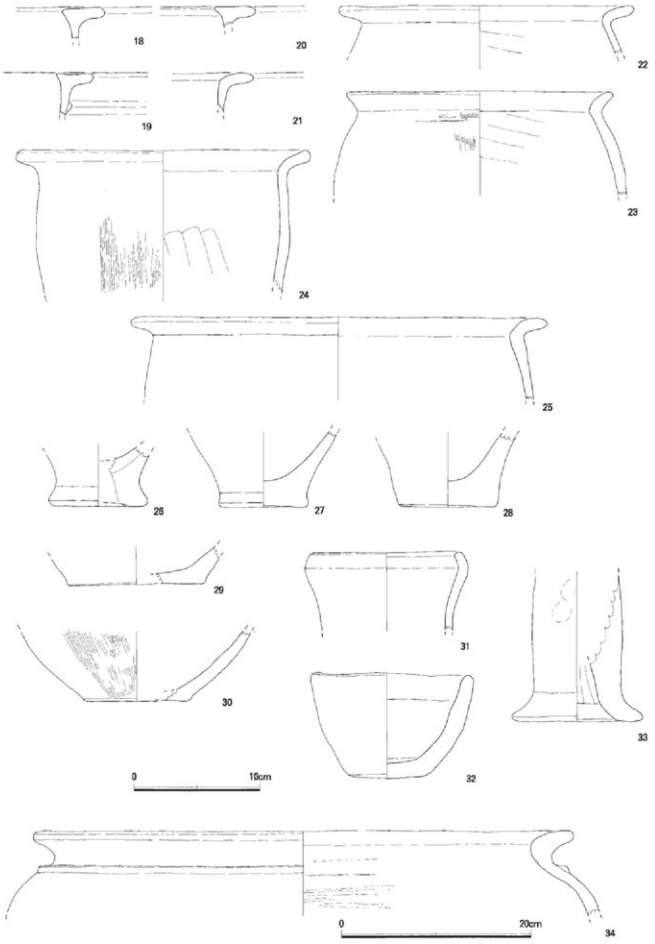


Fig.24　SD01　2層出土遺物実測図（18～33は1/3、34は1/4）

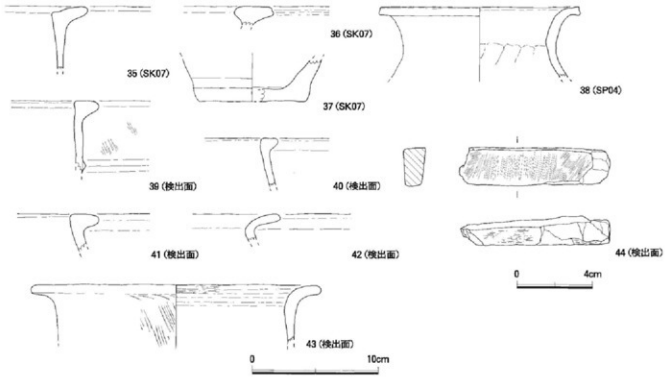


Fig.25　1－1区出土遺物実測図（44は1／2、35～43は1／3）

判断したものである。18～34は2層出土である。

8～11は甕口縁部～胴部上半である。口縁形状には逆L字状、く字状のものがある。12・13は鍔状口縁部破片である。12は端部外面に刻みを施し、13には猴跡的に赤色顔料が残る。14・15は底部破片である。ともにわずかに上げ底となる。16は中実の支脚であろう。上面に被熱の猴跡が残る。17は現状で方柱状をなす不明土製品である。脚もしくは把手の一部であろうか。

18～25は甕口縁部～胴部上半である。26～30は底部破片である。26は厚手の上げ底、27・28はわずかに上げ底となる。31は丹塗の剥落した袋状口縁部である。32は完形の鉢である。厚手で全面ナデ調整を行う。33は器台である。34は大型甕の口縁部破片で、1／8程度が残存している。口縁部復元外径57cmを測る。胎土に石英砂粒を多く含み、浅黄橙色を呈する。

1－1区出土遺物（Fig.25）

35～37は南西端のSK07のトレンチ出土遺物である。SK07の埋土は土器片を多く含む暗褐色土で、竪穴状の生活遺構の一部と考えられる。35・36は口縁部破片で、36は断面鍬状を呈する。37は底部破片で外面は2次的な被熱により灰白色を呈する。中期中頃～後半に位置付けられる。

38はトレンチ内で半裁を行ったSP04出土の壺口縁部である。埋土は暗灰褐色土で検出面からの深さは20cm程度である。

39～44は検出面出土遺物である。44はK153の北東側検出面で出土した灰白色シルト岩製の砥石である（出土位置はFig.23参照）。

このほかに検出面等からはSD01以西を中心に、コンテナ3箱程の遺物が出土している。時期は弥生時代中期初頭～後半の遺物が主体となり、極わずかに古墳時代の土師器が含まれている。

1－2区出土遺物（Fig.26）

45～47は上段部分の検出面出土遺物である。45・46は鍔状を呈する丹塗り壺口縁部である。47は逆L字状を呈する甕の口縁部である。また48～57は上段に堆積している後世の整地層と考えられる暗褐

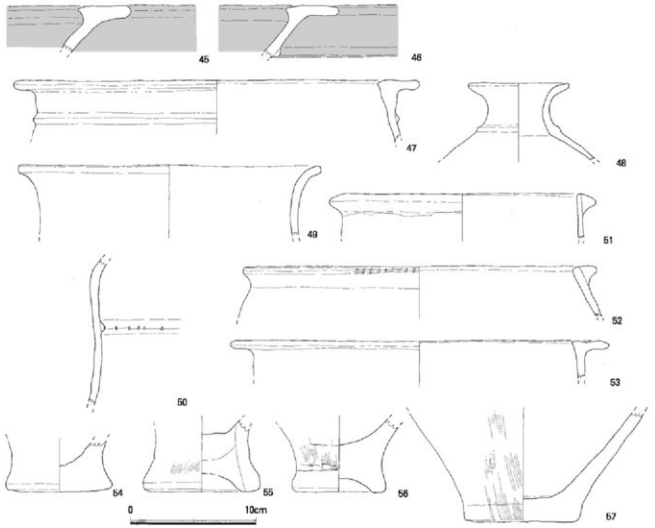


Fig.26　1－2区出土遺物実測図（1／3）

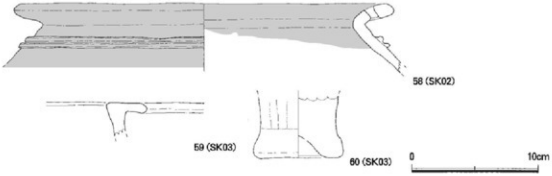


Fig.27　1－3区出土遺物実測図（1／3）

色土層（Fig.19：Ⅰ－Ｊ土層　4層）から出土した遺物である。1－2区ではこの整地層と検出面から弥生時代中期の土器小破片を主体とした遺物がコンテナ4箱出土している。

1－3区出土遺物（Fig.27）

58はSK02、59・60はSK03検出面出土の遺物である。ともに暗褐色土を埋土とするが、礫・遺物の混入程度などから甕棺ではないと判断した。58は丹塗りの甕、59は逆Ｌ字状の甕口縁部、60は上げ底

の底部破片である。中期中頃～後半に位置付けられる。このほか後世の整地層と考えられる暗黒灰色土（Fig.19：G-H土層　6層）から、須恵器を含み弥生土器を主体としてコンテナ1箱出土している。また、SP05・06からも弥生土器と考えられる小破片が出土している。

（3）2・3区の調査

概要

2・3区は大型掘立柱建物に関連する遺構の確認調査区として設定し、大型建物の北西部分を2区、南西部分を3区とした。ともに当初は大型建物の主軸方向にあわせて、重機により幅1m程度のトレンチを設定し調査を行ったが、両区とも調査範囲を拡大して、より面的な確認を行うこととした。

2区は盛り土を90cmほど除去した床土直下で、遺構面の黄褐色シルト層を検出した。遺構面は西端標高22.7m、東端22.6mを測り、全体にほぼ平坦となっている。主な検出遺構は黒味を帯びた暗褐色土を埋土とした平面（長）方形竪穴住居跡3棟、やや茶味を帯びた暗褐色土を埋土とし、平面小判型に復元できる竪穴住居跡1棟（SC02）等がある。また、竪穴住居跡の埋土上面から、暗黄褐色土と暗褐色土の混合土を埋土としたピット（掘立柱建物）も確認できた。この中で特に大型の方形竪穴住居跡をSC01とした。SC01は南北長9.5m、東西長10m程度を測る住居で、埋土には焼土粒が多く含まれている。主軸方位は6次調査で確認した大型建物とほぼ同じで、北側の掘り方通りを揃える位置関係から大型建物と並立もしくは切り合いを有する可能性が考えられ、大型建物に近いSC01東半部分を掘り下げた。その結果、出土遺物は大半が弥生時代中期に位置付けられるが、わずかに古墳時代後期の須恵器・土師器が出し、その他コンテナ1箱分の焼土塊が出土した。また住居の埋土除去後に床面で検出し掘り下げを行ったピットについても、ほとんどから焼土塊が出土している。これらは竪穴住居跡との関連が考えられ、大型掘立柱建物に関連する大型のピット等は認められなかった。なお、埋め戻しに当たり、更に敷地境界まで部分的に拡張・遺構検出を行ったが、大型建物関連のピット等については確認していない。また、埋め戻しは、SC01の掘り下げ部分に真砂土を投入して行った。

3区も現耕作土・盛り土を60cmほど除去した直下の褐色砂質土が遺構面である。なお、調査区東半1/3ほどでは、旧耕作土が認められず、盛り土直下で遺構面に達しており、部分的に圃場整備工事の削平を受けている可能性がある。遺構面標高は西側で23m、南東側で22.7m、北東側で22.55mを測り、東側～北東に向かって緩やかに傾斜している。検出遺構は竪穴住居跡、溝・土坑・ピットであり、埋土は暗褐色土を主体とするが、その他黄褐色砂質土を埋土とするピットもある。3区では遺構検出にとどめ、掘り下げを行わなかったため、明確な時期・遺構の性格については不明な点が多いが、遺構面清掃中に出土したコンテナ2箱分の遺物は、大半が小破片ながら、弥生時代中期に位置付けられるもので、このほかに古墳時代後期の須恵器破片や中世の青磁碗破片がわずかに認められる。また、3区においても埋め戻しに際して、北東側道路境界付近まで調査区の拡張・精査をおこなったが、いずれにおいても大型建物に関連するピット等は見られなかった。

遺構と遺物

SC01（Fig.29、PL.47・48）

大型の方形竪穴住居跡である。建物主軸はN-29°-Eにとり、6次検出の大型掘立柱建物にほぼ一致し、互いの北辺を揃え並立する位置にある。上面埋土は焼土粒を多く含む暗褐色土で、南北長9.5mを測り、東側では明瞭なラインは確認できなかったものの、調査区拡張部分で地山の立ち上がりが認められ、東西長はおおよそ10m程度と考えられる。SC01の西側には、焼土粒を含まない点以外は同様の埋土・主軸を有する竪穴住居が数棟認められる。また北側は茶味を帯びた暗褐色土を埋土とした小

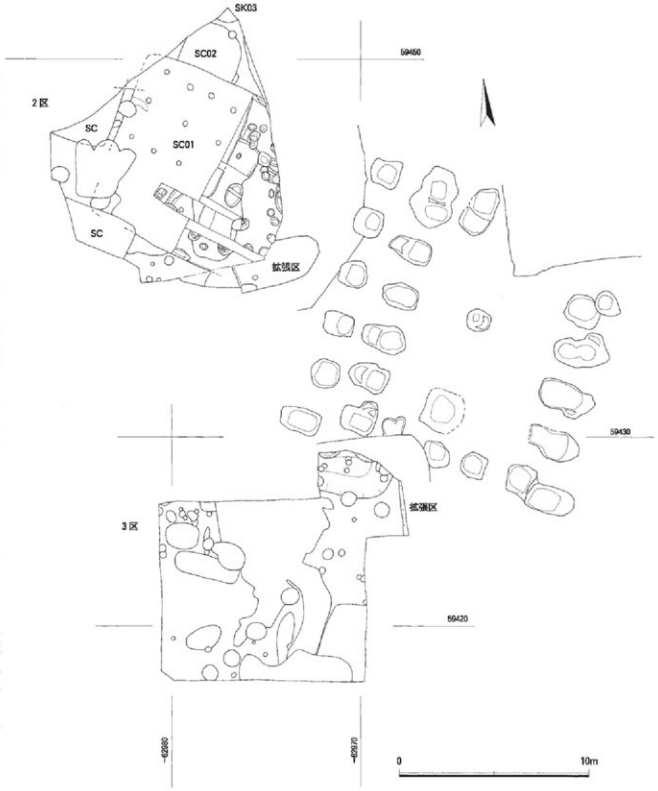


Fig.28　2・3区遺構配置図（1/200）

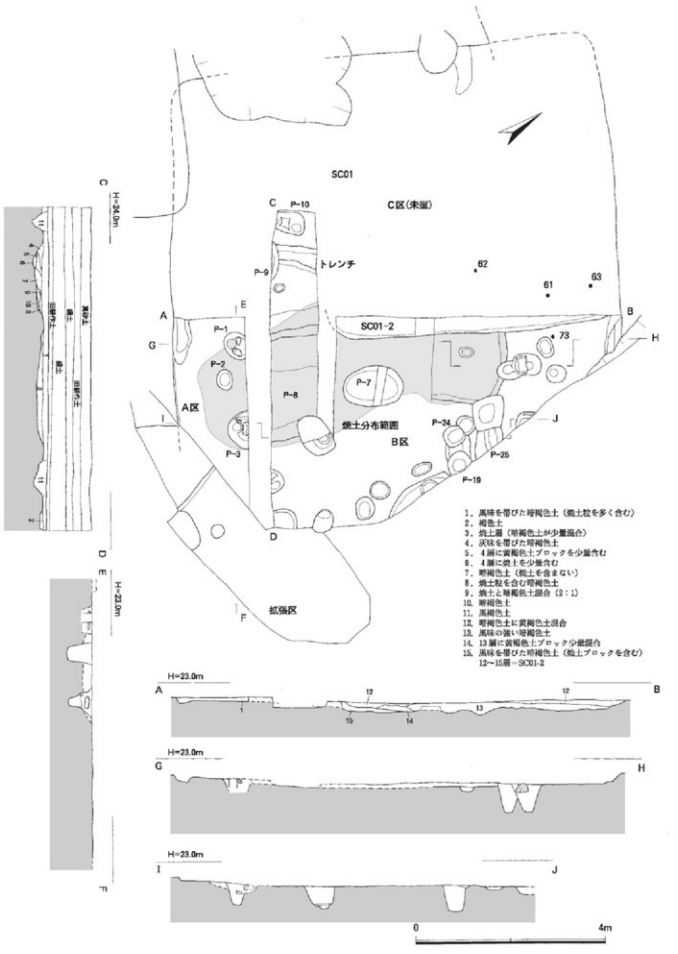


Fig.29　SC01実測図（1/80）

PL.47　SC01掘り下げ部分（南西から）

PL.48　SC01トレンチ土層

判形の竪穴住居跡（SC02）を切っている。

遺構確認後、大型建物関連遺構の検出を目的として、東半部分について掘り下げを行った。検出面より10～15cmほど掘り下げると床面となるが、床面は凹凸が著しい。床面からは住居埋土と同様にスサを多くまじえた焼土塊を含んだ暗褐色土を埋土とするピットを確認した。各ピットからは弥生時代中期を主体とした遺物と焼土塊が小破片で出土し、土師器・須恵器は出土していない。なお、竪穴住居に伴う明確な主柱穴は認められなかったが、南壁に沿って確認したP－1・3は柱固定用の礫を投入するなど一連の遺構と考えられ、位置的な関係から、竪穴住居跡に伴う可能性も考えられる。また床面中央付近には長さ6.5m、幅2.5mの溝状の掘り込みがあり、埋土はほぼ焼土のみで構成されている。深さは15cm程度で、断面形状は浅皿状を呈する。また、西端ではこの溝状遺構を切り込んで、竪穴住居跡と考えられる掘り込みを確認した（SC01－2）。埋土は黒味の強い暗褐色土で、SC01との判別は困難である。SC01－2床面はSC01床面より更に10cm程度掘り込むが、これも床面の凹凸は著しい。また、未掘部分の西壁沿いに竈袖状の焼土痕跡が認められたが、これはSC01－2に伴う可能性が考えられる。SC01－2として取り上げた遺物も弥生土器が主体を占めるが、未掘部分（C区）から出土した土師器・須恵器（61～63）はこの住居跡に伴う可能性が高い。なお、竪穴住居掘り下げ部分においても弥生時代中期後半に位置付けられる大型掘立柱建物を構成するピット等の関連遺構は見られなかった。

遺物はコンテナ3箱分出土し、大半は弥生時代中期の土器であるが、SC01未掘部分の埋土上面や住居埋土より須恵器・土師器破片が少量出土している。SC01－2に伴う可能性の高い土器もあるが、住居主軸・埋土の類似性や位置関係などから、SC01と時期的に大きな開きはないものと考えている。また取り上げた焼土塊は大きいもので5cm程を測り、スサを多くまじえた、比較的精選された粘土で作られている。古墳時代後期の須恵器・土師器は安定的に出土していないが、周辺では9次調査においても一辺8mを超える古墳時代後期の大型（長）方形竪穴住居跡が確認されており、SC01及びSC01－2も古墳時代後期の遺構である可能性が高いと考えられるが、今回の調査結果のみでは時期を明確にすることはできなかった。なお、上述のようにSC01と大型建物は主軸方位及び掘り方の北辺部を揃え並立した位置関係が認められ、弥生時代中期後半の大型建物と関連を有する大型竪穴住居となる可能性も否定できない。

出土遺物（Fig.30・31）

61～66・72は未掘部分のC区上面で出土している。61・62は須恵器、63は土師器甕である。64～66

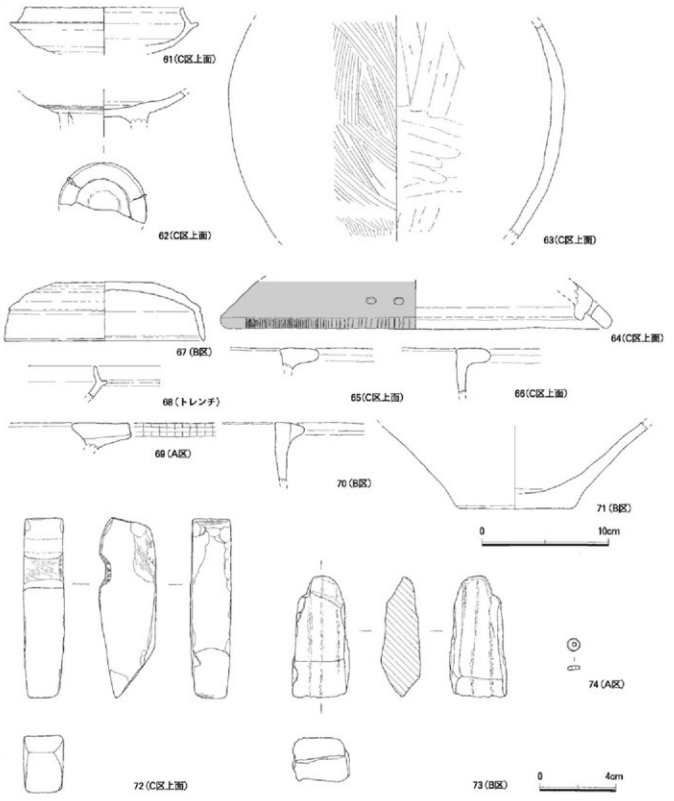


Fig.30　出土遺物実測図1（72～74は1/2、61～74は1/3）

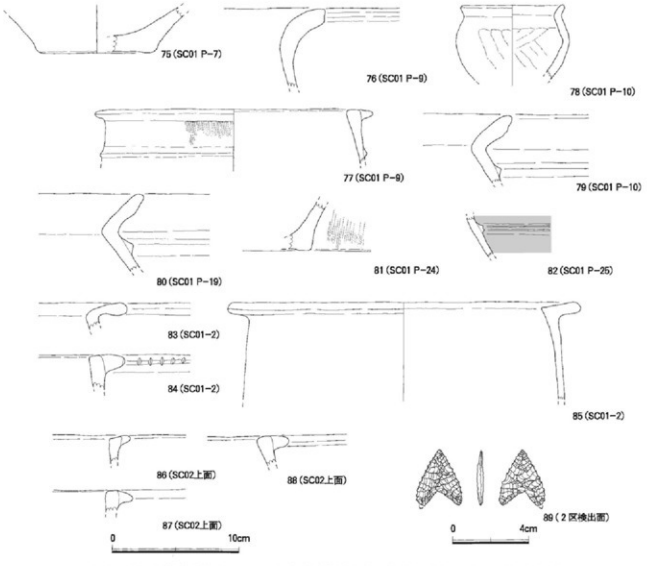


Fig.31　SC01出土遺物２及びSC02出土遺物実測図（89は１/２、75～88は１/３）

PL.49　SC01　P-８出土焼土塊

は弥生土器で、64は丹塗りの蓋、65・66は逆Ｌ字状を呈する甕口縁部である。72は頁岩製の抉入柱状片刃石斧である。

69・74はＡ区埋土、67・70・71・73はＢ区埋土、68は中央トレンチ内から出土している。67・68は須恵器蓋坏である。図示した以外の出土須恵器は、トレンチから１点とＣ区から蓋坏小破片が２点出土したのみである。69～71は弥生時代中期の甕・壺破片である。73は石英粒を含んだ凝灰岩製の片刃石斧である。いずれも風化が進んでいる。74は滑石製の小玉である。

75～82はSC01埋土除去後に検出したピットから出土した遺物である。弥生時代中期を主体とし

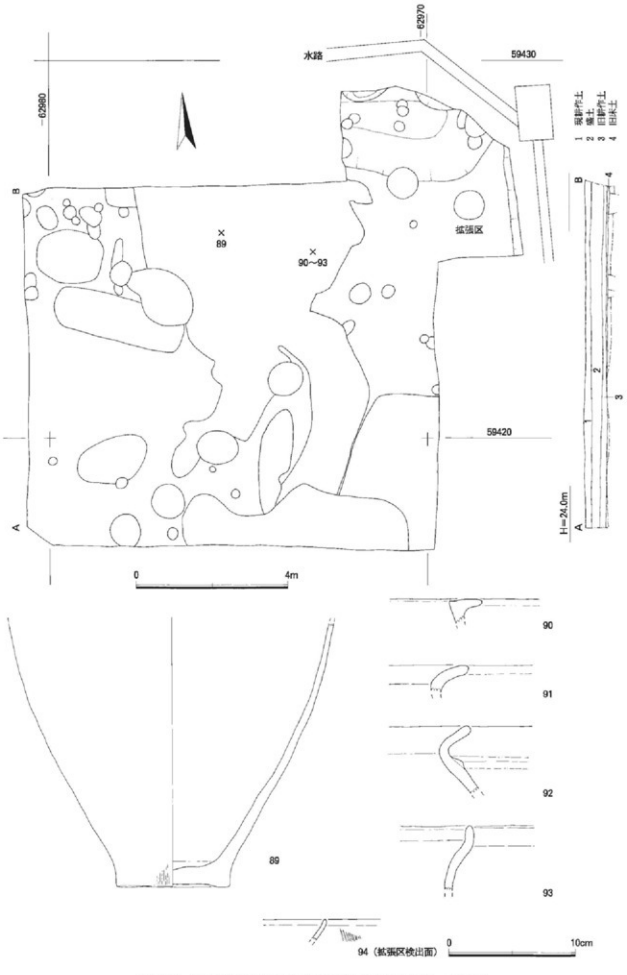


Fig.32　3区全体図及び出土遺物実測図（1/100、1/3）

PL.50　3区全景（西から）

PL.51　3区拡張部分（南から）

た土器が出土しており、古墳時代にかかる遺物は認められない。また、いずれのピットからも焼土塊が出土している。

83～85はSC01－2出土遺物である。掘り下げ部分に限れば弥生時代中期の土器のみである。

その他の遺物（Fig.31）

86～88はSC02上面出土である。弥生時代中期前半代に位置付けられる甕の口縁部である。

89は2区遺構面で出土した黒曜石製の石鏃である。またこの他遺構検出時に須恵器小破片が1点出土している。

4．小結

19次調査の主な目的は、①特定集団墓と呼ばれる高木地区埋葬遺構群の範囲確認、②高木地区大型建物に付随する関連遺構の精査、の2点である。

周辺埋葬遺構群から独立していないものの、一定の区画により視覚的に分離され、副葬品・埋葬形態等により優位性を保持する埋葬遺構群を特定集団墓とするならば、今回の調査により、史跡「吉武高木遺跡」において認められる特定集団墓は、主軸をそろえた大型長方形墓坑を有する甕棺墓・木棺墓及び標石等によって構成されているものと考えられる。具体的には19次調査1区SD01が西側の縁辺、K100が南側コーナー、K116を東側のコーナーとし、多量の副葬品と巨大な掘り方を有するM2の東辺中央を中心とした、南北18m、東西20mの略方形区画がこれに当たるものと考えられる。この際、SD01とK116東側の土坑は区画溝として機能しており、区画の北側に17m×38mの範囲で広がる周辺墓群とは、主軸方位・規模・掘り方形状・副葬品の有無などで明確に分離が可能である。これらの埋葬遺構群は少なくとも古墳時代までの生活遺構にはほとんど侵食されておらず、墓域として強く意識されていたと考えられる。更に、この特定集団墓内においても、より中央に位置し、豊富な副葬品を有している点で、集団墓内で優勢を保持していると想定できるM2・3、K117・110は、区画内の中核的な埋葬遺構として捉えることが可能であろう。また、今回想定した特定集団墓区画内における各埋葬遺構の副葬品の有無及び質、埋葬主体の違い、甕棺墓においては甕－甕、壺－甕という組み合わせの違い等に相違点が見出せ、それらは区画内の中央・縁辺という遺構配置にも反映されているものと考えられ、これらは特定集団内の構造を示すものかもしれない。

大型建物に関する調査については、2・3区において関連遺構の精査を行った。その結果2区では時期未確定ながら大型方形竪穴住居跡が認められ、東半部分の掘り下げを行ったが、大型建物を構成

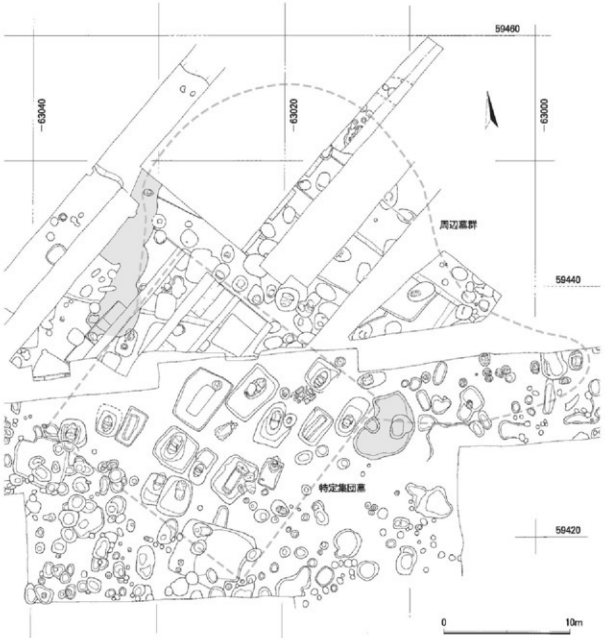


Fig.33　埋葬遺構群の区画（1/300）

するピット等は認められなかった。また3区についても、生活遺構の広がりは確認できたが、大型建物に関わる遺構は検出していない。以上の結果から、現段階で確認調査を行った範囲内では、大型建物を構成するピット等の遺構は広がらないと考えられる。ただ、大型建物が道路下に保存されている現状では、より正確な位置関係を求めることができないため、道路の廃止を待って最終的な確認調査を行う必要があろう。また、大型方形竪穴住居跡（SC01）については古墳時代後期に位置付けられる遺物が極少量出土しているものの、出土遺物の大半が大型掘立柱建物と同じ弥生時代中期に位置付けられる。住居跡の形状、今回の調査で出土した最新の土器、周辺での類例遺構の調査事例などから、古墳時代後期の遺構である可能性が高いと考えられるが、大型建物と主軸方位を同じくし、住居跡と建物の北辺の筋がほぼ通ることなど、配置に有機的な関係を想定させる点があり、大型建物を含めた本遺跡群における遺構の特殊性を考えると、大型の掘立柱建物と竪穴住居跡という組み合わせを考えることも可能と考える。今回の調査では、時期比定が不明確なままになってしまったが、弥生時代中期後半代に属する可能性も留保しておきたい。

福岡市、吉武高木遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

Ⅰ．吉武高木遺跡における植物珪酸体分析

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

2．試料

分析試料は、弥生時代中期初頭とされる甕棺墓（K140、K153、K154）の埋土などから採取された5点、およびトレンチ4（18次調査時の呼称〈＝19次調査1－3区〉：試料採取地点はFig.18参照）の土層断面から採取された3点の計8点である。試料採取箇所を分析結果状図に示す。

3．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
2）試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
3）電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
5）沈底法による20μm以下の微粒子除去
6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
7）検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10－5g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4．分析結果

（1）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および表2に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、アワブキ科、その他

（2）植物珪酸体の検出状況

1）トレンチ4

暗青灰色砂質土層（試料2、3）では、樹木のブナ科（シイ属）、クスノキ科、樹木（その他）、およびイネ科のミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある（杉山，1999）。また、同層上部（試料2）では、イネやヨシ属も検出された。イネの密度は個700/gと低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個/gを下回っている。

暗褐色粘質土層（試料1）では、イネが多量に検出され、ススキ属型、ウシクサ族A、ミヤコザサ節型なども検出された。イネの密度は13,300個/gとかなり高い値である。また、樹木ではブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、アワブキ科などが検出された。

2）K140

甕脇（試料2）では、イネ科ではミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。樹木では、クスノキ科が比較的多く検出され、ブナ科（シイ属）、樹木（その他）も検出された。遺構壁面（比較試料：試料3）では、試料2の分類群に加えてイネ、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型などが少量検出された。イネの密度は1,500個/gと低い値である。

3）K153

甕脇（試料1）では、イネ科ではイネ、ススキ属型、ウシクサ族Aなどが検出されたが、いずれも少量である。イネの密度は1,500個/gと低い値である。樹木では、クスノキ科が比較的多く検出され、ブナ科（シイ属）、マンサク科（イスノキ属）、樹木（その他）も検出された。甕内底部（試料2）でも、おおむね同様の結果であるが、イネの密度は3,000個/gと比較的高い値である。

4）K154

甕脇（試料1）では、イネ科ではイネが多量に検出され、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族Aなども検出された。イネの密度は5,300個/gと高い値である。樹木ではクスノキ科が比較的多く検出され、ブナ科（シイ属）、マンサク科（イスノキ属）、樹木（その他）も検出された。

5．植物珪酸体分析から推定される植生と環境

（1）トレンチ4

暗青灰色砂質土層の堆積当時は、部分的にヨシ属やササ属（おもにミヤコザサ節）などは見られるものの、何らかの原因でイネ科植物の生育にはあまり適さない環境であったと考えられる。また、遺跡周辺には部分的にブナ科（シイ属）やクスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。同層上部ではイネが検出されることから、周辺で稲作が行われていた可能性が考えられるが、微量であることから、上層から後代のものが混入した可能性も否定できない。

暗褐色粘質土層の堆積当時は、おもに稲作が行われていたと考えられ、周辺にはススキ属やチガヤ属などが生育する草原的なところも分布していたと推定される。また、遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

（2）甕棺墓

甕棺墓の埋土および甕内底部の土壌の堆積当時は、周辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。なお、甕内底部についてはイネ藁もしくは藁製品が入れられていた可能性も示唆される。当時の遺跡周辺には、シイ属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，31，p.70-83.

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用 ―古代農耕追究のための基礎資料として―．考古学と自然科学，20，p.81-92.

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究，38（2），p.109-123.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学，同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）―プラント・オパール分析による水田址の探査―．考古学と自然科学，17，p.73-85.

Ⅱ．吉武高木遺跡における花粉分析

1．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2．試料

分析試料は、弥生時代中期初頭とされる甕棺墓（K140、K153、K154）の埋土から採取された3点、およびトレンチ4の土層断面から採取された2点の計5点である。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一層準の試料である。

3．方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

1）0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎する。

2）水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去

3）25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

4）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す

5）再び氷酢酸を加えて水洗処理

6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

7）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。

イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

4．結果

（1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉8、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉12、シダ植物胞子2形態の計23である。なお、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。分析結果を表4に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属－マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属、イスノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、アカザ科－ヒユ科、キンポウゲ科、アブラナ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（2）花粉群集の特徴

1）トレンチ4（表3）

暗褐色粘質土層（試料1）では、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科が優占し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、チドメグサ亜科、タンポポ亜科、セリ亜科、キク亜科などが伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が比較的多く、シイ属－マテバシイ属、イスノキなどが伴われる。暗青灰色砂質土（試料2）では、樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属、イスノキ属、草本花粉のイネ科、チドメグサ亜科、ヨモギ属が検出されたが、いずれも少量である。

2）K140

遺構（試料2）では、樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属、草本花粉のイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が検出されたが、いずれも少量である。

3）K153

遺構（試料1）では、草本花粉のタンポポ亜科が少量検出された。

4）K154

遺構埋土（試料1）では、樹木花粉のクリ、樹木花粉と草本花粉を含むクワ科－イラクサ科、草本花粉のイネ科、カヤツリグサ科、アブラナ科、チドメグサ亜科、タンポポ亜科、ヨモギ属が検出されたが、いずれも少量である。

5．花粉分析から推定される植生と環境

（1）トレンチ4

暗褐色粘質土層（試料1）の堆積当時は、イネ科を主体としてヨモギ属、カヤツリグサ科、チドメグサ亜科、タンポポ亜科なども生育する日当たりの良い人里の環境であったと考えられ、遺跡周辺にはカシ類（コナラ属アカガシ亜属）を主体として、シイ類（シイ属－マテバシイ属）やイスノキ属なども生育する照葉樹林が分布していたと推定される。また、少量ながらイネ属型が検出されることか

ら、周辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

暗青灰色砂質土（試料２）では、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難であるが、イネ科、チドメグサ亜科、ヨモギ属などが生育する日当たりの良い人里の環境であった可能性が考えられる。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

（２）甕棺墓（K140、K153、K154）の埋土

弥生時代中期初頭とされる甕棺墓の埋土では、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難であるが、イネ科、ヨモギ属、タンポポ亜科などが生育する日当たりの良い人里の環境であった可能性が考えられる。花粉があまり検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。

文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.

中村純（1974）イネ科花粉について，とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

Ⅲ．吉武高木遺跡における種実同定

１．はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

２．試料

試料は、花粉分析に用いられたものと同一の計５点である。

３．方法

以下の手順で、種実の抽出と同定を行った。

１）試料200ccに水を加えて泥化

２）攪拌した後、0.25㎜の篩で水洗選別

３）双眼実体顕微鏡下で検鏡・計数

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

４．結果

分析の結果、種実はいずれの試料からも検出されなかった。また、同定が可能な炭化材も検出されなかった。

文献

南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276-283.

Ⅳ．吉武高木遺跡における蛍光Ｘ線分析

１．はじめに

土壌中に含まれるリンやカルシウムの起源としては、土壌の母材、動物遺体、植物遺体などがある。また、遺跡の生活面や遺構内には遺体、排泄物、代謝物、食物残渣、燃料灰などに由来するリンやカルシウムが蓄積している。カルシウムは一般に水に溶解しやすいが、リンは土壌中の鉄やアルミニウ

ムと強く結合して難溶性の化合物となるため、土壌中における保存性が高い（竹迫、1993）。このようなリンやカルシウムの性質を利用して、墓状遺構などにおける生物遺体（人骨など）の確認、および生活面や遺構面の確認などが試みられている。

2．試料

分析試料は、K153甕内底部および甕脇（比較試料）から採取された2点である。

3．分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム（日本電子㈱製，JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。以下に分析の手順を示す。

1）試料を絶乾（105℃・24時間）

2）メノウ製乳鉢を用いて試料を粉砕

3）試料を塩化ビニール製リング枠に入れ、圧力15t/cm²でプレスして錠剤試料を作成

4）測定時間600秒、照射径20mm、電圧30kV、試料室内真空の条件で測定

X線発生部の管球はロジウム（Rh）ターゲット、ベリリウム（Be）窓、X線検出器はSi（Li）半導体検出器である。

4．分析結果

各元素の定量分析結果（wt%）を表5に示し、リン酸（P_2O_5）とカルシウム（CaO）の含量を表6に示す。

5．考察

一般に、未耕地の土壌中におけるリン酸含量は0.1～0.5%程度、耕地土壌では1.0%程度である。農耕地では施肥による影響が大きく、目的とする試料の分析結果のみから遺構・遺物内における生物遺体の存在を確認するのは困難である。このため、比較試料（遺物・遺構外の試料）との対比を行う必要がある。

分析の結果、リン酸含量は甕内底部では12.6%とかなり高い値であり、甕脇（比較試料）の1.3%と比較して約10倍にもなっている。カルシウム含量は、甕内底部では18.8%とかなり高い値であり、甕脇（比較試料）の3.9%と比較して約5倍にもなっている。

以上の結果から、K153甕棺内の底部には、リン酸やカルシウムを多く含む人骨などの生物遺体が存在していた可能性が高いと考えられる。人骨などの動物の骨は、主成分がリン酸カルシウム$Ca_3(PO_4)_2$であり、リン酸とカルシウムの比率はおよそ1：2である。今回の試料ではこの比率が1：1.5であり、リン酸に対するカルシウムの割合がやや低くなっているが、前述のようにカルシウムは一般に溶解性が大きいことから、土壌中で拡散・移動した可能性が考えられる。

文献

竹迫　紘（1993）リン分析法．日本第四紀学会編．四紀試料分析法2，研究対象別分析法．東京大学出版会，p.38-45.

V．まとめ

植物珪酸体分析および花粉分析の結果から、甕棺墓の埋土および甕内底部の土壌の堆積当時は、イネ科、ヨモギ属、タンポポ亜科などが生育する日当たりの良い人里の環境であったと考えられ、周辺では稲作が行われていたと推定される。また、遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科、イスノキ属、カシ類などの照葉樹林が分布していたと考えられる。

蛍光X線分析の結果、K153甕棺の底部ではリン酸やカルシウムが多量に検出され、人骨などの生物遺体が存在していた可能性が高いと判断された。

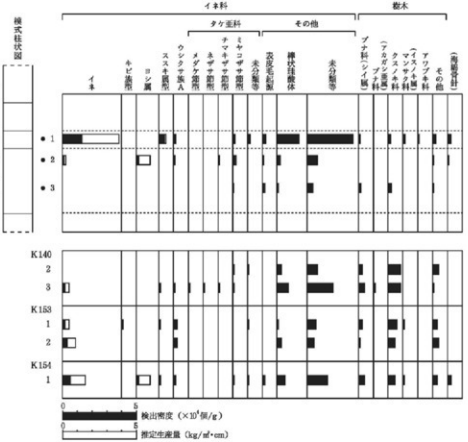
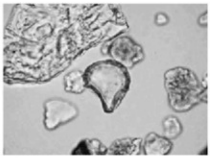


表１　福岡市、吉武高木遺跡における植物珪酸体分析結果

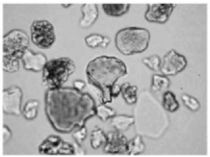
検出密度（単位：×100個/g）

	地点・試料	トレンチ4			K140		K153		K154
分類群	学名	1	2	3	2	3	1	2	1
イネ科	Gramineae (Grasses)								
イネ	*Oryza sativa*	133	7			15	15	30	53
キビ族型	Paniceae type						7		
ヨシ属	*Phragmites*		15						15
ススキ属型	*Miscanthus* type	37				8	7		8
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	15	7			8	22	23	15
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)								
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus					8			
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa					8			
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.		7			8			
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	15	22	7	8	8			8
未分類等	Others	15			8		7		8
その他のイネ科	Others								
表皮毛起源	Husk hair origin	22	7	15					15
棒状珪酸体	Rod shaped	148	22	7	30	75	7	30	53
未分類等	Others	310	67	37	68	173	60	45	136
樹木起源	Arboreal								
ブナ科(シイ属)	*Castanopsis*	7		15	23	38	22	8	38
ブナ科(アカガシ亜属)	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*					8			
クスノキ科	Lauraceae	15		22	83	83	60	45	45
マンサク科(イスノキ属)	*Distylium*	15					7		8
アワブキ科	Sabiaceae	7							
その他	Others	22	7	7	38	8	30	38	30
(海綿骨針)	Sponge	22	7						23
植物珪酸体総数	Total	761	165	112	268	445	247	220	432
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・m）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出									
イネ	*Oryza sativa*	3.91	0.22			0.44	0.44	0.89	1.56
ヨシ属	*Phragmites*		0.94						0.95
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.46				0.09	0.09		0.09
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus					0.09			
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa					0.04			
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.		0.06			0.06			
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.04	0.07	0.02	0.02	0.22			0.02
タケ亜科の比率（%）									
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus					43			
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa					18			
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.		45			28			
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	100	55	100	100	11			100

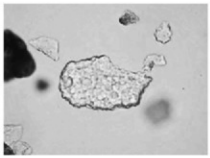
表２　福岡市、吉武高木遺跡における植物珪酸体分析結果



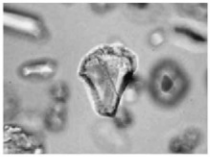
イネ
K153　2



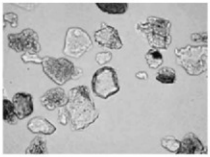
イネ
トレンチ4　1



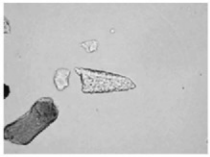
ヨシ属
K154　1



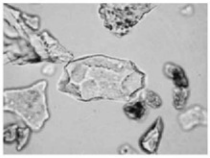
メダケ節型
K140　3



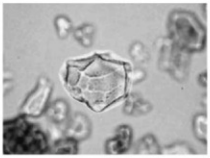
ミヤコザサ節型
トレンチ4　1



表皮毛起源
K154　1

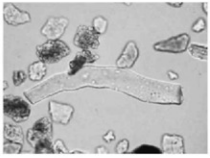


ブナ科（シイ属）
K153　1

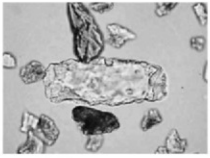


ブナ科（シイ属）
K140　3

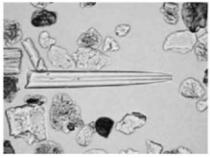
クスノキ科
K153　1



マンサク科（イスノキ属）
トレンチ4　1



アワブキ科
トレンチ4　1



海綿骨針
トレンチ4　1

50μm

写真1　植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

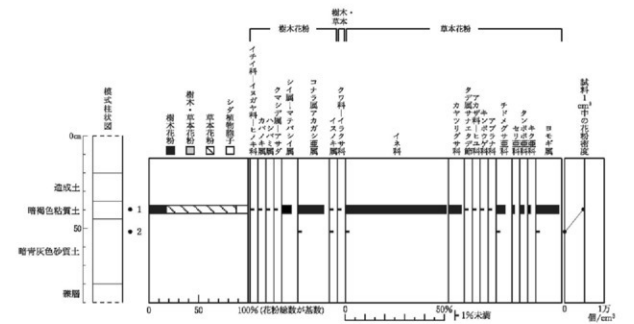


表3　吉武高木遺跡、トレンチ4における花粉ダイアグラム

分類群		トレンチ4	K140	K153	K154
和名	学名	1	2	1	1
樹木花粉	Arboreal pollen				
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	1			
カバノキ属	*Betula*	1			
ハシバミ属	*Corylus*	2			
クマシデ属－アサダ	*Carpinus-Ostrya japonica*	1			
クリ	*Castanea crenata*				1
シイ属－マテバシイ属	*Castanopsis-Pasania*	16			
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	44	1	2	
イスノキ属	*Distylium*	1	1		
樹木・草本花粉	Arboreal・Nonarboreal pollen				
クワ科－イラクサ科	Moraceae-Urticaceae	1			1
草本花粉	Nonarboreal pollen				
イネ科	Gramineae	169	6	1	9
イネ属型	*Oryza type*	1			
カヤツリグサ科	Cyperaceae	21		1	2
タデ属サナエタデ節	*Polygonum* sect. *Persicaria*	2			
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	1			
キンポウゲ科	*Ranunculaceae*	3			
アブラナ科	Cruciferae	2			1
チドメグサ亜科	Hydrocotyloideae	15	2		1
セリ亜科	Apioideae	4			
タンポポ亜科	Lactucoideae	7		1	2
キク亜科	Asteroideae	4			
ヨモギ属	*Artemisia*	29	2	4	4
シダ植物胞子	Fern spore				
単条溝胞子	Monolate type spore	41	6	2	2	2
三条溝胞子	Trilate type spore	4		2		2
樹木花粉	Arboreal pollen	66	2	2	0	1
樹木・草本花粉	Arboreal・Nonarboreal pollen	1	0	0	0	1
草本花粉	Nonarboreal pollen	268	10	6	1	19
花粉総数	Total pollen	335	12	8	1	21
試料1cm³中の花粉密度	Pollen frequencies of 1cm³	4.7 ×10³	1.2 ×10²	7.7 ×10	0.7 ×10	1.5 ×10²
未同定花粉	Unknown pollen	15	5	3	0	1
シダ植物胞子	Fern spore	45	6	4	2	4
寄生虫卵	Helminth eggs	(－)	(－)	(－)	(－)	(－)
明らかな消化残渣	Digestion rimeins	(－)	(－)	(－)	(－)	(－)

表4　吉武高木遺跡における花粉分析結果

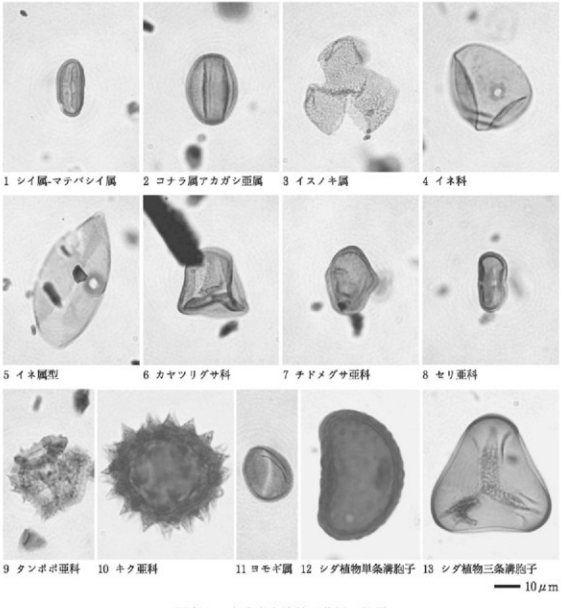


写真2　吉武高木遺跡の花粉・胞子

原子No.	地点・試料 化学式	K153 甕内底部	甕論(比較)
11	Na2O	0.000	0.205
12	MgO	0.784	0.960
13	Al2O3	12.841	16.557
14	SiO2	35.773	58.622
15	P2O5	12.563	1.306
19	K2O	2.276	3.273
20	CaO	18.845	3.939
22	TiO2	1.909	1.881
23	V2O5	0.047	0.063
25	MnO	0.499	0.513
26	Fe2O3	13.870	17.509
30	ZnO	0.092	0.000
37	Rb2O	0.035	0.028
38	SrO	0.100	0.060
40	ZrO2	0.000	0.065
80	HgO	0.376	0.000

表5　吉武高木遺跡における蛍光X線分析結果　　単位：wt(%)

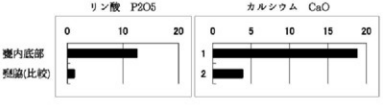


表6　吉武高木遺跡、K153におけるリン・カルシウム含量　　単位：wt(%)

書名ふりがな　よしたけいせきぐんにじゅうに
書　名　吉武遺跡群22
副書名　―史跡整備に伴う第17・18・19次調査報告―
巻　次
シリーズ名　福岡市埋蔵文化財調査報告書第1061集
編著者名　宮井善朗、本田浩二郎、長家　伸
編集機関　福岡市教育委員会
発行機関　福岡市教育委員会
発行年月日　20090331
作成法人ID
郵便番号　810－8621
電話番号　092－711－4667
住　所　福岡市中央区天神１－８－１
遺跡名ふりがな　よしたけいせきぐん（しせき　よしたけたかぎいせき）
遺跡名　吉武遺跡群（史跡　吉武高木遺跡）
所在地ふりがな　ふくおかしにしくおおあざよしたけ183ほか
遺跡所在地　福岡市西区大字吉武183他
市町村コード　40134
北　緯　33度32分16秒
東　経　130度19分10秒（世界測地系）
調査期間　17次　20040119～20040318
18次　20050126～20050309
19次　20050719～20050922
調査面積　17次　753㎡
18次　720㎡
19次　970㎡
調査原因　史跡整備
種　別　集落・墳墓
主な時代　弥生時代
遺跡概要　17次　史跡地内の北東部には古墳時代中期～後期の集落が展開している。
史跡地中央部の谷地形は弥生時代には存在しているが、形成時期は不明である。
史跡地南西部についても生活遺構を確認している。
18次　高木地区特定集団墓の墳丘については確認できない。
19次　特定集団墓はおおよそ18m×20mの方形区画となる。
大型建物関連遺構は確認できなかった。
建物西側に大型方形竪穴住居跡を検出したが、時期は不明瞭である。
特記事項

吉武遺跡群22

―史跡整備に伴う第17・18・19次調査報告―

2009年（平成21年）３月31日
発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号
印　刷　森田印刷所
福岡市中央区大手門２丁目１番21号